

俳句雜誌

令和五年十月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十六卷第十号

水 明

2023 10月号



《今月のかな女》

窓の猫抱けば濡れ居し秋の夕

(句集「龍膽」)

長谷川かな女

かな女師は、子供の頃から愛猫家であったようで、晩年に長谷川家を訪れると、かな女師が書齋で猫を膝に載せて書き物をしておられたのをよく見掛けた。さて、この句の猫はどんな姿をしているのだろうか。出窓のところに居た猫を抱いたら、毛が少し濡れていた。昼間に降った雨で濡れた草叢に入ったからだろうかと思いつつ、猫の身体を拭っている。「秋の夕」が、猫とかな女の絆をしっかりと包み込んでいる。

(鬼之介・註)

水 明

第1117号

— 華の一句 —

ささやかな風に浴衣の身八つ口

由良ゆら女

男の着物には無い身八つ口。そもそ
も身八つ口は何のためにあるのか疑
問をいだいていたが、本句を機に調
べてみて納得した。その言葉自体に
艶があり、またその狭い隙間にも魅
力のある言葉である。さて、句に登
場した着物は浴衣なので、正装の時
の着物とは趣のちがった雰囲気が見
られている。浴衣は藍染かそれとも
凝った柄物か。粋に着こなした浴衣
の身八つ口に、ささやかな風を感じ
る夕刻である。
(鬼之介・推薦)

水明

令和 5 年
10 月号

今月のかな女

華の一句

秋草の庭 (作品)

鐘 楼 (近詠)

素のままに (近詠)

風 琴 雪欄作家近詠鑑賞

ゆずり 葉 季音月評

季音「雪」 (同人作品)

季音「月」 (同人作品)

季音「花」 (同人作品)

『水明誌』を繙く

現代俳句鑑賞

鼓笛賞・山紫賞作家の頁

新同人紹介

山本鬼之介

矢作水尾

小倉倭子

町野広子

檜鼻ことは

茂木和子 森本早苗
矢作水尾 ほか

井上燈女 高島寛治
梅澤佐江 ほか

野田静香 河野はるみ
青木鶴城 ほか

水野星閣

網野月を

北山建治郎・大塚茂子



九月号の巻頭句

俳誌望見

染谷風子

夏季競詠

柚木治子
大橋廸代
矢作水尾
ほか

夏季競詠作品評

山本鬼之介

水琴窟 (水明集八月号鑑賞)

池田雅夫

鼓笛集 (同人作品)・私の一句

曲淵徹雄

句集喝采

山紫集

水明の記事掲載他誌より転載

水明例会報・各地句会報

新珠賞作品募集

水明塾のお知らせ

風声・発展基金御礼

後記

題字・長谷川かな女 表紙・内田恵子 カット・福田千春

秋草の庭

山本鬼之介

元の鞆に収まるふたり
佞武多の夜

惜敗の顔すがすがし
秋の昼

去りぎはに小節きかせて
法師蟬

庭に八千草老いても可憐なるひとよ
新しき童女の卒塔婆はつ嵐
星飛ぶや物干し台に隣るひと
新装の花屋にとどく秋の草
銀漢や小塚原はこの辺り

鐘

楼

矢作水尾

身を寄せて寺の大樹の片かけり
袖口を一つ折して盆掃除
石仏や兵つはものごとき炎天下
踏石の火照り烈しき炎天下
髪撫でるやうに日傘をたたむ墓地
ところどころに風吹いてゐるはすの花
樹林帯うごかす風の夏の夕
夕焼の町を包める寺の鐘
七回忌終へて見上ぐる銀河かな
菩提寺の墓いらかを染めて夕焼す

菩提寺の山門をくぐるとなだらかな坂が続き、上り切った処に鐘楼がある。白木柱に支えられた梵鐘は幾多の風雪に堪えて、重量感が深く青銅色に緑青が吹き和みの象徴的な趣がある。手入れの行き届いた樹木や草花が梅雨の菩提寺を明るくしている。

遠出の少なくなった私は折々の草花の中で、ゆるりと墓参のひとつときを楽しんでいる。

素のままに

小倉倭子

待宵の鉄橋渡る音はるか
神木に心身委ね良夜なり
名月や万感込めて息を吸ふ
月光に晒すこの身や露天風呂
おぼろげな視覚聴覚雨月かな
十六夜のノンアルワインで酔ひ心地
かの人と秘する約束居待月

思えば曾て、月に魅せられ天文学的な興味や憧憬を抱いたことは秋に限らず、四季折々の月にありロマンを追い又センチメンタルな想いを覚えた時期が大方にあるう。
人生あらかた過して来たが今年の稀なる猛暑、酷暑には心身へ口へ口となり、せめて、月に虚を求めたが外気の暑さと室内のクーラーの温度差の現実感覚を体感するばかり。それゆえ、虚の詩界を望見したい。
性。「居待月」のかの人はすてきな女

風琴

季音雪欄作家近詠鑑賞

町野広子

◇若狭の秘仏（七月号）

山寺の銀杏若葉のうすみどり
観音の手足に不祥事五月闇
地藏百体茂りの中に安座かな

島津初花

◇お宮参り（七月号）

聖五月曾孫のお供宮参り
純白の祝ひ着囀降る如し

山中みどり

町の指定文化財である銀杏観音。それは樹齢四五〇年程の大銀杏の根元近くに彫られている十一面観音像。現在四十一世の住職が在位の「城谷山諦應寺」。その三十世代の住職が彫られた。像を守るがごとく、枝葉を伸ばす大銀杏の若葉の美しさは、生命の尊さに匹敵。二句目大切な観音様の手足に不祥事とは一体何があったのか。傷を付けられた？鳥の糞で汚れた？大いに気になる。本堂横の山の中腹には「百体地藏」が安置されている。実数は二五〇体。お礼参りに奉納され今も里の方々を守られ、深い信仰が伺える。

里の田の水溢れ出し山若葉
白壁の倉の家紋へ五月風

山あり海あり自然に恵まれた若狭。田には水、山は若葉、これだけで充分に景色が見え、更に中七が端々しい。又、村には歴史ある家も多し、蔵に掲げる家紋がそれを表わす。五月の爽やかな風に、白壁がより白く美しく里人の誇りを感じる。近くに住みながら知らずに居た場所。今、改めて古里の良さを思う。掛け替えのない場所なのである。

この春曾孫さんの誕生で、作者ご夫婦は曾祖父母となられた「曾孫のお供」が何とも微笑ましい。一人の嬰に何人の大人が幸せのお裾分けを戴くのでしよう。嬉しい以外の言葉が見つかりません。晴れの日に相応しい純白の祝いで着。降る程の囀、青い空、嬰の明るい未来が楽しみである。

乳ねだる児の甘泣きや額の花
万緑や誰彼に似て児の律儀
ただ祈る健やかなれと百千鳥

お宮参りのさ中、嬰は眠ったり泣いたり、大人の都合は何のその。乳をねだる「甘泣き」が又可愛い。何もかもが可愛いのである。二句目「誰彼に似て」と、父方母方の大人達が幾度もものぞき込む「児の律儀」とは、言い易て妙。三句目、「ただ祈る」この一言で、限らない愛の全てが語られる。作者のコメントに拠れば、現在患って居られるご主人様がその胸に嬰を抱いたとたん、表情が輝いて生気が漲り「草原情歌」を歌い出した。それは嘗て孫娘（嬰の母）を抱き、優しく揺らしながら歌った子守歌であった。生命のエネルギーは偉大。早速幸せのお裾分けが届いたのである。

◇紅薔薇（八月号）

由良ゆら女

繚乱の薔薇に定めの見え初めて
香を嗅ぐや体内めぐる薔薇の紅

体調を崩された作者。原因不明とのことで、上手に付き合
って行く事になるらしい。が、前向きで行動的な作者は、赤
く美しいものに会いに薔薇園へと足を運ぶ。今を盛りと咲く
花々の中にもそれぞれの定めを見る。静かな心の内が思われ
る。二句目、一口に薔薇と言っても色、型、大きさ全てが異
なる。特に香りは体内に沁み渡る。深く深く呼吸し、血流と
なり、作者は元気を貰えた事であろう。

薔薇ジャムの紅茶ほのぼの読む手紙
熱こもるロングドレスを衣紋竹
紅薔薇の渦めくるめく夢の中

自分の為に求めたジャムを紅茶の中に少し混ぜてみる。ほ
のかな薔薇の香を楽しみつつ読む手紙は、嬉しい方からの物
にちがいない。「ほのぼの」は、紅茶でもあり、作者の心でも
あろう。帰宅して真っ先にする着替え「熱こもる」の導入に
その状況が一瞬にして読み取れる。暑いさ中ドレスには、ど
れ程の熱がこもっていた事か。衣紋竹が和の雰囲気です適。
薔薇達の鮮烈な紅色は、いつ迄も眼奥に残像として残り、
ふと、夢だったのかもと思う程である。そして、正に夢の中
にも現われる事と思う。充実した一日、紅薔薇達は作者に一
層の活力を与えてくれたに違いない。

◇サバンナの砦岩（八月号）

網野月を

白獅子の昼寝むさぼる偽平和
伝説の怪鯉の鱗夕立晴

掛け軸や襖絵等に描かれた獅子は、虎でもライオンでもな
い。が、見慣れている我々は、さ程疑問にも思わずに来た。
それは多分、身近に獅子舞と言う物を見た事があるからかも
知れない。架空の物ではあるが縁起物として存在している。
その獅子の昼寝も又架空の平和の世界なのである。
かつて山形のある寺の人面魚が話題となり、連日多くの見
学者で賑わった。鯉の顔模様が人の顔に見えるのである。掲
句の怪鯉とは、どの様な物なのか「伝説の」とあるので、鱗
に特徴があるらしい。それは夕立の止んだ後の池に現れる。
読み手は楽しく、色々と空想する。

大夕焼闘人長槍に凭れをり
砦頂より地の果て眺む晚霞の鷹
赤龍の透く眼光にたぢろろぐ

雄大なサバンナの夕焼の中、長槍に凭れ佇む男。闘人即ち
狩人であろう。一枚の絵を見ている感がする。砦の頂に止ま
り鋭い眼で辺りを見回す一羽の鷹「地の果て」「晚霞」物の
気配や静けさがありありと浮かぶ。「赤龍」これも又架空の
生き物。なのに色々な場面でその姿を見ている我々には、近
くて遠い存在。眼光鋭ければ鋭い程、その威光が発揮される
十二支の内、只一つ現実でない生き物。作者の「理想」「空
想」の世界は、果てしなく広がる。

ゆずり葉

◆季音八月

檜 鼻 ことは

蠟梅の姉妹のごとく実りけり

網野月を

冬も終わりを告げる頃、蠟梅の黄色の花が開き始める。それは、名の通り蠟細工のような艶ある美しい花卉である。切り花にすると部屋に甘い香りが漂い、綺麗な花の姿とともに楽しむことができる。

蠟梅の花を愛でることができるのは、咲き始めてよりほぼ一か月。花が散りしばらくすると実がついているのに気づく。どうも葉が出る前に実がつくようである。五月ともなれば、蠟梅の木に新緑が始め、実も大きくなっている。

「姉妹のごとく実りけり」と詠まれているように、イソギンチャクのような可愛い姿の実である。新緑がつき始めてから、半月もすれば樹全体が美しい緑の葉で覆われ、冬にはまた美しい花を咲かせる。そしてまた、新緑のころに姉妹のごとく実をつけるのである。

早苗田の水の加減を二度三度

松宮保人

新緑の美しい季節が訪れるころ、田んぼには水が張られ、田植えの準備が整う。頃合いを見て、田植えが始まる。

唱歌「夏は来ぬ」に「さみだれのそそぐ山田に 早乙女が裳裾濡らして 玉苗植うる 夏は来ぬ」と佐々木信綱が詩を残しているが、田植えが終わったばかりの田んぼは、まだ苗が小さく、水面に里山の景色などを写し、のどかで美しい光景となる。

いつのころからか、担い手農家による稲作が主流となつてしまった現在であるが、掲句の早苗田は、自作をされている田んぼである。田植えの後、水の加減を二度も三度も見張るといふ措辞に、長年の経験に裏打ちされた稲作への思いを感じずにはいられない。

見納めの生家は更地花ミモザ

松本光子

時代の流れ、家族の形の変化により、誰も住まず空き家になつてしまった生家をどう処するかと悩まれている方は多い

と思料する。このままにしておけば老朽化は年々進み、生家のある地域への迷惑にもなる。さりとて、自分が育った生家を処分することになると、なかなか踏ん切りをつけるのが難しいことだ。

悩まれた末、更地にと決められたのであろうが、致し方ないことと察する。

華やかな黄色の花ミモザが青空に美しく、花言葉は「感謝」。更地となった生家の跡に立つ作者の心象を語るようである。

遅くとも私の歩幅 青田風 松山清子

散歩は楽しい。誰にでも気に入りの散歩道というものがあって、同じ道でも、季節の移ろいとともに、その景色は変わる。冬が終われば梅の花、やがて桜の三月。そして、爽やかな青空と緑が美しい新緑の季節がやってくる。散歩道にある田んぼも、水張り田、早苗田、稲が青々と育つ青田へと姿を変えていく。

今日の散歩は青田風が心地よい。景色を楽しみ、あれこれと思いをめぐらし、誰からも邪魔されない自分の時間。「遅くとも私の歩幅」で、今日の散歩を楽しまれてください。

麦秋や 一日一個の茹で玉子 下川光子

一日一日を丁寧に、大切に生きていらっしやる作者の姿を

見る思いがした一句。

卵は、人が健康を維持するために必要な栄養素をバランスよく含んでいる食べ物として、健康や美容への効果をあらためて見直されているらしく、食べ方も様々で気軽に調理ができる。

一日一個の茹で玉子に塩を一振り、ささやかな日々の楽しみでもあることだろう。麦秋は、梅雨入り前のつかの間の乾燥期、そして梅雨が過ぎれば猛暑の夏。これからも、健やかに一日一日を大切に生きて過ごされていかれますように。

豊かなる石の裸婦像新樹光 後藤綾子

街角や公園に設置されている裸婦像はことのほか多い。古代ギリシャより裸婦像が彫刻や絵画のモチーフとされてきたのは、均整のとれた肉体を調和ととらえ、そのハーモニーに美を感じ、そこに神の似姿を見ていたということらしい。

街角の裸婦像は、日常においてはまるで風景の一部のようになっていて普段は意識の外側に追いやって見ているのかもしれないが、屋外に裸婦像が置かれているのは日本特有のことであって、西洋においてはそのほとんどが室内に展示されているようだ。

太陽の光にきらめく若葉のもと、健康的な肢体から初々しさとはのかな色香を感じさせる裸婦像に命の輝きを感じたであろう作者の姿が、爽やかな初夏の映像と共に伝わって来た。

季
音
雪



踊
る
茂
木
和
子

ビル建つるための穴掘る油照
炎帝に唸りを嚙ます掘削機
踊の輪近づきすぎて手の触るる
伸び縮み時に抜け穴踊の輪
踊る手のひらりと返る裏表

空
蟬
森
本
早
苗

しがみつくと幹の空蟬そつと剥ぐ
空蟬の執念吾に爪を立つ
天赦日炎暑の長蛇夢売場
瀬戸は夕風パールブリッジ灯を点す
引く人も犬もシニアや法師蟬

敗戦忌 矢作水尾

新刊書 柚木治子

金閣の姿涼しき水鏡
遺骨なき墓標に香を敗戦忌
音残し一葉の秋を知りにけり
東南西北勢ひづく雀^{ジャン}夏の夜
漁火の潮路はるかや夕端居

毒秘めて凌霄の花あでやかに
尼のやう生くると決むる鳳仙花
球場のフェンスにすがる秋の蟬
花野風ひさびさに買ふ新刊書
端正に処暑の風受け高野槇

秋暑し 山中みどり

行合の宵 由良ゆら女

戦争の話に厭いてかき水
善き事も悪しきも忘れ白木槿
夫米寿帝国ホテルに夏料理
異国語の柑堀浅草の秋暑し
逝く夏の気配滔々の隅田川

路地裏は風呂のほひや遠花火
ささやかな風に浴衣の身八つ口
迫りきてしばしとどまる大花火
かなかなや刻む刃先の手暗がり
新涼の灯をこぼしゆく屋形船

横浜戸塚・舞岡界限 網野月を

きらら虫 石山かつ子

向日葵の胸張るとき大葉かな
昼顔の白さを拒む木陰かな
出穂や風はいつでも新しき
伝令の旗指物や夏芭蕉
萍に竹の落葉を載せにけり

元禄よりの家系図に吾きらら虫
平家巻物その偽物に雲母虫
抑留を語らぬ父や敗戦日
鉄幹の言葉みやびや酔芙蓉
狂つたやうに犬が穴掘る終戦日

虚 貝 石井喜恵

風鐸の響き 大橋廸代

夏深し無人駅舎の時刻表
夏深し浜辺に拾ふ虚貝
水母寄す波頭を砕く隠れ岩
原爆忌国旗はためく巡視船
ざくざくと刻むキャベツや原爆忌

八月やナイルの怪魚釣りに発つ
女の嘘は秋の金魚のあぶくとも
鈴虫や兄と末期のはなしなど
盆僧の行儀いましむ姉御かな
台風ははるか風鐸やたら鳴る

野の花 大村節代

鬼やんま 栢尾 さく子

落研おちけんに入部希望者蟬しぐれ
投げ入れの壺に野の花原爆忌
将棋盤据ゑて人待つ夕端居
発掘の古墳に祭器秋暑し
城跡に百鬼あらはる星月夜

甦生と云ふ言葉しみじみ山清水
夏雲呑気頭尾吹かれて影もなし
鬼やんま恋むすぶとき紙の音
採血のご褒美うまし豆ごはん
吾が寝言われが聞きいる大昼寝

朝茶粥 小倉倭子

カンナ ナ 菊池 ひろこ

朝焼けのカーテン開き合掌す
盆の月義父母の棚に朝茶粥
敗戦日スニーカーで行く安行墓地
敗戦日杜のベンチで缶コーヒー
奉拝し御朱印いたたく終戦日

カンナとの背くらべすも老なりや
立秋の空よりどつと来るメール
百日紅墓地の緑地化すべり出す
手秤りの酒の馳走や雁渡し
雁の秋V字に折られストレッチャー

星 影 五 明 昇

八 月 椎 野 美 代 子

門ごとに今日の高さの花木權
いけず口はんなり隠す秋簾
踊の輪天辺にある一つ星
踊達者が揃ふ夜更けの櫓下
星月夜木曾路は今も山の中

八月の海見る時の遠目癖
佇めば袴りの深し八月来
八月や殊に饑き臍も腑も
馬上像の劍八月さらに鋭し
八月のぬばたまの闇きなくさし

車 座 に 境 延 昭

蜘蛛の巣 島 津 初 花

切窓に星をかぞへるバンガロー
車座に薬缶でまはす芋焼酎
危絵のあぶなきあたり雲母虫
夏芝居鬢付け匂ふ棧敷席
妻の守る糠味噌床や原爆忌

滴りや町屋の軒に手水鉢
石仏の衣となりぬ苔の花
蜘蛛の巣に掛かりし朝の野菜畑
朝蜘蛛の静かに降りて時止る
青柿や朝マラソンの定時刻

土用波 鈴木康世

八月 十倉和子

御用邸続きの浜も土用波
土用波三半規管狂はせる
赤人の歌詠みし浜土用波
土用波富士悠然とそこにあり
富士塚に響く海鳴り土用波

語り部となる女生徒に八月来
恐竜博見てきてヒーロー夏期学校
遅れくる音の愉しき遠花火
洗ひ熊の爪に堪へたる西瓜撫づ
強面の大向日葵が杖拒む

夕風 田寺玲子

ぶだう 鳥羽和風

夕風の浜に錆びたる大錨
遊船の架橋くぐりて向きを変へ
短夜や弦張り替へてアロハオエ
サーファアのまたころげ落つ地獄波
日盛りのテトラポッドを釣り場とす

マスカット幸せ色を放ちけり
黒葡萄粉を吹く様の化粧箱
吾子の口葡萄摘めば跳び出す実
新涼や鯉に撒く餌ワンコイン
臍の緒は桐の小箱に去ぬ燕

熊 蟬 永野史代

別荘の朝の目覚めや遠郭公
夏館しづまり返つてゐる鉄扉
「怪人二十面相」の椅子横たはる夏館
ミシンに背凭れて母の端居かな
火のやうに鳴くヒロシマの熊蟬は

夕 風 西山貴美子

マスクメロン氣息も添へて渡さるる
子子のあたま重たく生まれけり
夕風をいの一 番に釣忍
冷奴乙なせりふに引かされて
ゼリ―一掬平均台がゆれてゐる

瓜の馬 波多野寿子

迎火や敷石灯し苑灯し
盆花を飾りつつふと淋かりけり
穏やかな夫を思ふや瓜の馬
奥の間や家紋さやかに置灯笼
送り火の終りて仰ぐ星の天

畳 百 畳 星野和葉

新涼や畳百畳素のままに
巫女の衣の白なほ白く秋涼し
流星や目玉剥き出す磨崖仏
鳳仙花語り継ぐてふ使命かな
笑ひ倒くる女子三人鳳仙花

季音月

盆 供 養

井 上 燈 女

立秋や豆腐の布目水に透く
 廃屋を沈めて迫る草いきれ
 父母のこと遠のく月日盆供養
 作柄の話しきりに盆の客
 草の花小銭編み目に下げ草鞋

夏 芝 居

高 島 寛 治

夏芝居粋な台詞も国訛り
 馬の脚やたらと太き夏芝居
 晩酌は五時と決めたる生身魂
 新涼や裏門残す新校舎
 生身魂同じ話を繰り返す

桐 一 葉

梅 澤 佐 江

吾がしるべ青春の書は紙魚の糧
 墨東を荷風の心地秋涼し
 珈琲の豆挽く香り今朝の秋
 舞扇ひるがへる如一葉落つ
 桐一葉更なる静寂深めたり

涼を待つ

松 井 由 紀 子

赤色灯わめきつつ去る残暑かな
 湯のやうな雨が残暑の街洗ふ
 秋暑止まず迷路に入りし母のこと
 キャンプ帰りの子より匂へる山の秋
 風すこし親しき素振り今朝の秋

生 身 魂

大 場 順 子

白蓮の化身か匂ふ蓮の花
 サーファアの空より下り来土用波
 少年が太宰を読んでる晩夏
 今もなほダンディに決め生身魂
 団栗を踏めば脈打つ足の裏

法師蟬 大塚茂子

機町に機音消えて法師蟬
遠き日の指切りげんまん法師蟬
ごつごつと青き匂ひの荔枝かな
白旗の少女の島に荔枝あり
遺されし友の歳時記ひらく秋

赤まんま 森川義子

廃線の鉄路の荒び赤まんま
カンナ燃ゆ鉄扉鋭き大使館
羅を着こなす反り身大鏡
千人針の今も脳裏に終戦忌
故郷の縁台恋し流れ星

野馬追 丸山マスマ

白玉や日照雨過ぎ行く峠茶屋
一足先に猫の来てゐる夕端居
荒事も女形も熟す夏芝居
野馬追の陣頭駆くる黒葦毛
鳳仙花三猿刻む神厩舎

風待ち 正木萬蝶

風待ちの防人の恋百日紅
パチンコ店の軍歌遙けし土用波
サバイバルゲームの如き日溽暑
蜘蛛の子は亡者の塚に群がりぬ
大夕焼戦場めきて火の鳥来

燕帰る 松宮保人

土の香のむんむんとして夕立後
蚊帳吊りし部屋の四隅に古き釘
迎火や人それぞれに先祖あり
無人駅の屋根を掠めて秋燕
ひしめくや白磁の皿の黒葡萄

脱帽 近藤徹平

終戦日正午脱帽全球児
暑氣払ふ新人類の無礼講
衣魚払ふ祖父の襟章星三つ
神武在さぬ国史教科書敗戦忌
昼寝覚下車駅もはや過ぎ去りぬ

二日月 池田雅夫

星雲の光芒淡し二日月
まろやかに風吹き渡る花野かな
赤とんぼ雲の高さをほしのまま
九十九里風つぶしに颯引く
反転のネガや朝霧明けやらす

夏手袋 渡辺舍人

約束の時刻ときに來ぬ人原爆忌
網手袋とほし婦の腕となる
幽霊の昼飯を喰ふ私の時間
一本の風せの道に臥し熱帯夜
片陰の商店街や失せ物す

秋立ちぬ 井上玲子

穂高岳の空は紺青秋立ちぬ
秩父路の風のにほひも秋に入る
能登の海のごむ渚や流れ星
遠き日の父と縁台流れ星
桐一葉身に寄る月日しみじみと

赤と黒 福田千春

百日紅デイサービスの迎車くる
喪歸りの黒の一団さるすべり
火だるまの絵が眼裏に原爆忌
蜘蛛の巣を払ひ進むや少年団
夜の秋滑ぬめつて光る黒茶碗

いなせ 熊倉千重子

鞍に乗るをなごの射手よ秋立てり
立秋の風が風生む軽井沢
異常気象にいよよ炎となる花カンナ
口尖りいなせな貌の秋刀魚買ふ
鳳仙花通る猫の尾実を弾き

三光鳥 上戸千津子

夕風や無言で行き交ふ港町
町内会目礼しつつ盆をどり
雛四羽に噂持ち切り三光鳥
赤まんまふつと気が飛ぶ故郷へ
風微か路地を抜けゆく秋の使者

城下町 松本光子

花木槿城址に残る舟出口
花木槿音なき音に振り返る
秋簾 藍染 匂 ふ 城下町
野仏の欠けし片耳秋の声
昼店灯す 初秋の中仙道

日向水 野口和子

山越えの地響き届く遠花火
Uターンの若き園主の梨の店
竹すだれ無人売場の柵ひとつ
秋暑し 沸騰 寸前 日向水
夏帽子風に飛ばされ独り言

流れ星 山田美佐尾

膝を抱き夜の白むまで流れ星
矢継ぎ早に流れ星飛ぶ八ヶ岳
盆の月ぞろぞろ下るる船着場
灯を消して庭の鈴虫夢の中
役柄は「お嬢吉三」や星涼し

夏芝居 内田恵子

波止場ゆくカラフルぞうり水母浮く
夏衣風透き乳房軽くなる
幽明に響く柝の音 夏芝居
白鷺や記憶ゆらゆらうすれゆく
白玉や絵巻の美女は下脰れ

行合 荒井俱子

原爆忌「エノラゲイ」とは母の名と
語り部はかつての少女原爆忌
手渡しで受ける郵便むくげ垣
白木槿記憶ほとりと抜け落ちる
花むくげ 防災グッズ点検す

底紅 松山清子

新涼や頬うつ風に生きぬかむ
香煙の秋日に載りぬ浅草寺
底紅やかの人逝くと便りくる
電子辞書たよりの苦吟葡萄食む
焼け跡の夢みし朝の黒ぶだう

子孝行 町野 広子

まつすくな目線の先に日輪草
爽竹桃日々を元気に子孝行
白玉を先か最後か好物論
白玉やはんなりやんはり京言葉
あけすけに言ひ合へる仲ソーダ水

盆用意 西浦 千枝子

腕のギプス取れ一つ気に悪さ夏休み
夏の朝ラッパ飲みする水薬
細りゆく母のかひなや盆用意
婆さまの小言の多く盆用意
新道はカーナビに無く梅鉢草

法師蟬 川崎 道子

蟬時雨玉音放送聞きとれず
法師蟬息ながながとオペラ歌手
法師蟬眠る機関車みがきあく
坊泊りかなかな夕べのコンサート
エジプト画も子規も横向き糸瓜棚

世界のHAIKU 特集

日本の俳句

赤野四羽 内村恭子 角谷昌子
五島高資 田中亜美 董振華
夏石番矢 西村我尼吾
堀田季何 向瀬美音

新連載！ 諸家書架 堀田季何

※巻頭三句

遠山陽子

石井いさお

行方克巳

松岡隆子

深沢暁子

花谷清

※今月の筆

浅井陽子

大橋一弘

※俳句と短歌の10作競詠

岡田由季

魚村晋太郎

※好評連載

成瀬政博

とりあえずの日々

筑紫馨井

坂口昌弘

青木亮人

句の手触り、俳人の響き

大西朋

俳句へのまなざし

神作研一

藤村公洋

二ノ宮一雄

一望百里

俳句四季

Haiku Shiki

2023年11月号

10月20日発売
定価1100円(税込)

<https://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

季音花

余白 野田静香

秋めくや余白の多き水彩画
 鈴虫を入れてオカリナ演奏す
 目力や絵師入魂の立佞武多
 氏神を祀る古鏡や秋の声
 秋雨やソール・ライターの贈り物

八月の鐘 河野はるみ

鶴いくつ折らば終はるや原爆忌
 六日九日長崎の鐘鳴りやまぬ
 流れ星離れ小島の神神へ
 簪のやうに流星君の髪
 屋敷跡あるじ無きとて桐一葉

正夢 青木鶴城

秋浅しベルトの穴が見つかからず
 雨一つ二つ四つよ十と桐一葉
 入江へと続く棚田や一人秋
 生き下手の父老木の百日紅
 女郎花あれは正夢だったのか

亡き友 日高道を

深海に男のロマン夏の果
 夏野原うれしきものに友の顔
 白南風や音楽室に「夏は来ぬ」
 無心に遊ぶ友似の子供カンナ燃ゆ
 風呂敷に清酒一本盆見舞

絶巔 笹本啓子

秋めくや飛行機雲の絶巔よ
 花木槿防災倉庫ある公園
 留守がちの隣の庭や花木槿
 鰯を捌く漁師の指のはものめく
 秋旱脚の伸びたる浮棧橋

坂の町 檜鼻 ことは

本馬場を駆くる栗毛や梅雨あがる
熱帯夜終着駅の時刻表
砂埃のこるバス停車いきれ
屋上の肘つく手摺り遠花火
風鈴や越中八尾は坂の町

降りし色 曲淵 徹雄

絵団扇の風はんなりと襟元へ
真つ先に犬が尾を振る帰省かな
帰り船を弄ぶごと土用波
朝顔に天から降りし空の色
禁断の木の実あれこれ生身魂

国仲間 保坂 翔太

離陸する翼を叩く男梅雨
帰省子や屋号呼び合ふ国仲間
大正池渡り来る風夏館
山鳩も鳴かぬ日盛り過疎の村
外に出で泣く子をあやす土用の夜

夏を楽しむ 石田 慶子

さるすべり杖たてかけて拭く眼鏡
黒服の差し出す傘や驟雨来る
蜘蛛の糸裏木戸抜けて宅配便
火を囲むフォークダンスや避暑地の夜
挿げ替へし鼻緒と一緒宵祭

味噌蔵 染谷 風子

金剛の星降る嶺よ登山小屋
陸前の沖に逆波やませ吹く
初茄子や糟糠の妻髪染むる
味噌蔵の闇の匂ひよ初嵐
裏紙に狂句一句を西鶴忌

盆の月 渋谷 きいち

ふる里へ不義理を詫びて盆の月
鈴虫に語りかけては眠れぬ夜
鈴虫の鳴かぬ日はなし救急車
銀座線浅草行に秋の蠅
策のまま手造り母の新豆腐

天守閣

横山君夫

秋刀魚焼く真一文字を裏返し
嫁迎ふ家の周りは稲の花
生前葬終へていきいき生身魂
稲妻のたびに浮き立つ天守閣
乗換への長き階段秋暑し

西瓜ごろごろ

石川理恵

落蟬を掃けば命を吹きかへす
砂山を人もも攫ひ土用波
西瓜ごろごろ動物園の象たちに
西瓜選る山形産か千葉産か
古里があるやうで無く西瓜食む

曼珠沙華

飛永鼓

蜘蛛の囿に先づ捕まりて朝仕事
新じゃがや手間のかからぬ二男坊
素通りをさせぬ野道や曼珠沙華
曼珠沙華野道にありて美しく
脇役の渋い演技や茗荷の子

原爆忌

宮崎チアキ

被爆者の化身立つやに雲の峰
被爆者と共に歩まむ原爆忌
鳥声の賑々しき今朝の秋
蛇口より常温の水秋に入る
矢継ぎ早の子の質問や秋立ちぬ

蜘蛛

鈴木玲子

雨粒の光る蜘蛛の巣くつきりと
鬼蜘蛛の巣をたたむとは健気かな
汗汗汗火鍋囲むも乙なもの
巨樹の間に紅こぼれをり百日紅
白提灯のそよと揺らぎぬ迎盆

初嵐

原田秀子

呵呵大笑完熟ゴーヤー赤き口
初嵐ぴくりと動く牛の角
ノンブレスながき一声法師蟬
菩提寺の叢竹さわぐ初嵐
薙ぎ倒し風の狼藉初嵐

夜の秋 下川光子

乳とふ静かな刻を夜の秋
しみじみとフランス映画夜の秋
ゆるやかに生きて団扇の風好む
丸刈りの減りて残暑の甲子園
逡巡の鷲を促す今朝の秋

レトロな街 野村美子

住吉のレトロな街の秋の夕
断捨離や古き日記に紙魚の跡
終戦日今まだ海に眠る骨
秋めくや線路の見ゆる並木道
富士遠し三保松原の秋早

盆荒れ 高橋満耶子

連日の警戒アラート極暑かな
応援歌のひびく球場雲の峰
合戦の武将姿に水鉄砲
大混乱の新幹線や盆荒るる
花柄の小鳥のとばり涼新た

不夜城 松島寛久

迎へ火や婆遺影に敬礼す
物思ふ日本髪の裸婦蚊帳の中
雷の妻もはきゐる虎のパンツ
ごきぶりも夫もうろつく台所
夜の秋沖に不夜城現はるる

真つ赤な嘘 瀬戸雄二郎

西瓜食べ真つ赤な嘘を飛ばしけり
西瓜より赤い爪以て種飛ばす
五分分するに難儀す大西瓜
大西瓜谷水に浸けバーベキュー
シルクロード転がつて来し大西瓜

萩の風 葛城千世子

向日葵や海をテーマに選ぶ白
好物の御供へ選び萩の風
女子高生葉味無しにし冷素麺
キャンセルの列颱風七号は週明け
曝板を掛けの花器とし秋桜

盆踊 中野 疆

西瓜切る疎開は遠き祖母の家
終戦日悲しきことに黙禱す
盆踊り解禁といふ活気あり
アイスクリーム平和の味を楽しめり
台風の行きつ戻りつ北進す

零余子 田中章嘉

草野球終へれば変はる秋の声
音もなく空へ白線のびる秋
秋刀魚焼く煙もたてず膳の上
烈風に耐へ雨にも耐へて桔梗咲く
箸先に零余子の芋の戯れて

叙勲 後藤綾子

新涼や友の叙勲が新聞に
甲虫文月といふも健やかに
みえみえの俄手品師夏休み
鳳仙花沈む心の和みたる
子を抱きて秋雷鳴に背を正す

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊俳句界 2023年 11月号

特集
俳句×○○
〜俳句とコラボ!

○特別寄稿〜携った映画作品を詠む
角川春樹

○俳句×映画 坂本宮尾 関悦史

○俳句×小説 恩田侑布子 加藤かな文

○俳句×音楽 浦川聡子 黒岩徳将

○俳句×絵画 武藤紀子 西村我尼吾

○俳句から掌編小説を書く
高柳克弘 諏佐英莉

「タラヒア」俳句界NOW 小澤實
特別作品21句 中山和子「初蝶」

特集 俳句で綴る自分史
守屋明俊 井上弘美 岸本尚毅
森賀まり 田中亜美 篠崎央子
西川火尖

*セレクトション結社「火神」永田満徳
私の一冊 山田閔子

対談 佐高信の甘口でコンニチハ!
川口真由美 (シンガーソングライター)

「俳句界」投稿欄 一流選者14名!
日本一充実の投稿欄

※一部変更の可能性があります。
株式会社 文學の森 株 株式会社 文學の森
お求めは... ●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

『水明誌』

を緋く

(水明八月号)

水野星間

(「岳」同人)

誰を待つやら三条小橋を召して 山本鬼之介

京都の鴨川に架かる三条大橋は、東海道の西の起点として有名だが、並行して流れる人工河川の高瀬川に架かる三条小橋も、負けず劣らず人に知られたる名所。幕末の志士達にまつわるエピソードも多々あり、佐久間象山や大村益次郎らの受難碑も立つ。木屋町通にも近く、小体な店や酒場が多い。小生は嘗て、新婚旅行の帰途、京塗りの漆職人であった兄夫婦の所に立ち寄り、木屋町の古い洋食屋兼バーで大いに飲ませて貰った懐かしい思い出がある。その兄も今は亡い。

掲句は、夏着の緋を召して、何やらの用事で小橋の袂で人待ち顔の人物を描写している。千年の歴史の舞台である京都、それも、人々の賑わいと数々の逸話に満ちた三条小橋とくれば、もうこれ以上の舞台装置は必要無い。かような句は、余計な説明を排して読者の読みに任せるのが最も真つ当な鑑賞方法。従って、読者は自らの想いを巡らし、掲句のもたらしてくれる古都の雰囲気と思いつ切り酔えば良い。小生も無粋な鑑賞は避けることとするので、ご海容のほど。

海 of 青飛魚の碧陽は真上 菊池ひろこ

掲句を読んで、まず、かの有名な篠原鳳作の無季句（しんしんと肺碧きまで海のため）を思い出した。鳳作句は、赴任地の宮古島と本土間の船旅に因んだ作品と云われているが、ひろこ句は全くの場所無限定の作品である。但し、飛魚は夏の季語である故に明確な季感に裏付けられ、構図的には大海原と、どこまでも青一色の夏空という立体的な俯瞰が見て取れる。

さて、掲句の肝は何と言っても中七の飛魚の色であろう。その魚体は宙を飛ぶ際に何色に見えるのか、小生は定かでないが、作者には、海面の反射を受けた魚体はやや薄暗く映じたのであろうか。キラキラと輝く海面の上を滑るように飛んでゆく飛魚の様子は、えも言われぬほどの美しさに違いない。その飛魚の魚体に真上から降り注ぐ陽光は、確かに海面にあえかな影を落とし、その為に飛翔体がやや鈍色に見えてもおかしくは無い。こうした一連の色彩のドラマも船旅の醍醐味のひとつ。魅力的な海の大景を的確にとらえた秀作である。

現代俳句鑑賞

網野月を

葉桜やさくらが咲いてゐたなんて

伊藤政美

(『俳句四季』8月号・巻頭句より)

上五の季語「葉桜」は、元もと桜花の散った後の若葉青葉を愛でる際に使用して、江戸中期以降に季題として取り入れられた季語である。昨今では、新緑の美しさを言うだけではなく桜花と比することで、花の華麗さと葉の清新さを言い分けて使用されることも多くなった。この句は、そのどちらとも解釈できるようだ。「葉桜」と言いながら桜花を連想させてどちらに重点を置いて鑑賞するかは読者に任されている。

切り柄杓金玉糖を子に許し

秋尾 敏

(『俳句四季』8月号・季語を読む金玉糖より)

風炉点前の際にお茶請けとして「金玉糖」を供していたのである。親が子にお茶の作法を教示している景を想像することが出来る。「切り柄杓」の際に子はやっと口直しの「金玉糖」を口にすることが出来たのであろう。

離れ座敷へ金玉糖を運ぶひと

山本鬼之介

(『俳句四季』8月号・季語を読む金玉糖より)

茶道の際のお茶請けか、懷石料理の際の冷菓として「離れ座敷」まで持ち込まれた「金玉糖」であろうか。季語としての菓子を主人公にすることなく「運ぶひと」にフォーカスしている。自ずと「ひと」の容姿と物腰を想像してしまう。

水際に兵器性器の夥し

久保純夫

(『俳句四季』8月号・結社「儒良」アルバムより)

句作の起点がどこにあるのか、筆者には想像もつかない。不勉強の至りであるが、人間を破壊する象徴としての「兵器」と人間を生み出すことの出来る「性器」が混在して、尚「夥し」と言っているのだ。生物が水中にあった期と陸上に生きるようになった期の境目を「水際」と表していると勝手に考えて解釈の糸口としてみたい。

幹といふ動かざるもの青あらし

江中真弓

(『俳句四季』8月号・結社「暖響」アルバムより)

上五中七の句意は、個々の主観を超え、且つその事柄を是認して判断している、ということである。ねばならぬ、ということにも通じるだろう。座五の季語「青あらし」の現状把握も卓抜している。

呼びごゑの訝しさうや松羅 石田郷子

〔俳句〕8月号・星合より

「さるおがせ」はその生命力を愛でるものなのか、奇態を演出しているものなのか。受け取り方は個々人に任ざれていることであろう。掲句は何とも不思議な様態を引き出しているように読める。他に「星合の笹原を熊ゆくらしき」「文出しにさやけき橋を渡りけり」がある。

ついでもじいじの笑顔あると信じている孫四つ 中塚唯人

〔俳句〕8月号・爺さんの夏より

作者は自由律俳句の主誌『海紅』の現社主である。筆者に掲句を評する力はないが、感銘する句である。他に「ポツケの中の幸せ温める」「どうしても送り火焚いてしまう昭和生まれだから」がある。

蜃気楼命名前の赤子抱く 山本左門

〔俳句〕8月号・チェホフ忌より

この作者は、確固たる世界観を構築することに俳句という手法を用いている。人の世の不確かさと共に、腕に抱く赤子の現実感を取合せて、自らの世界観を確認し、世界観に試練

を与えているようだ。他に「逃げ水の先ハーメルンの子供たち」「地球儀のシベリア青しチェホフ忌」がある。

蚕豆の莢に残りし光かな 関根かな

〔俳句〕8月号・莢より

句に込めようとする何ものかは作者のみが知りえるものだが、読み手の態度が試されるような句である。まだ枝先に残されている莢ではなくて、食する際に莢から豆を取り出した後の莢を想像した。これから捨てられようとする莢に光を感じた作者なのである。

先生がうるさい時雨集めている 中内亮玄

〔句集〕北國幻燈より

中七の「うるさい」「時雨」を何かの譬えとして捉えるよりは、そのままに解したい。語彙の関係性や意味するところは難解であるが、座五の「集めている」は真実なのであろう。「先生」は作者の生涯の師のことであろうと想像した。

ミサイルに雲雀と名づけ放ちやる 堀田季何

人間の盾が一分稼ぐ夏至
はんだぎのきすぐち愛のいろに濡れ

〔俳誌〕楽園 第二巻湊合版・祖国より

三句共に反戦の句意を込めたものであろうと勝手に解釈した。作者の創造の世界は広角であって、句のテーマも多岐にわたっているが、昨今のご時世から筆者は反戦の句として読んでしまった。

私の三句

北山 建治郎

私はキャリア二十年以上になる、「浦和レッズ」のサポーターであり、今でも高校の同級生を中心に応援仲間を作り、年間何試合か地方での試合に遠征に行く。地方には美味しい食べ物が沢山あり、絶好のグルメ旅行になる。

サッカーの俳句は難しく、チャレンジしてみるが、良い句ができない。ただし、遠征先の季節を感じ、風土の匂を嗅ぎ、景色や人を好奇心を持って見ると、新しい発見がある。物知りになった様な気になる。

サッカーは「動」、俳句は「静」、二つの趣味はうまく調和しているか。でもこれだけは解っている。二つとも楽しい、それは間違いない。

さて今秋は何処へ行くか。そうだ新潟へ応援に行く。「のど黒」と「枝豆」が待っている。

四万十の静の青さや夏料理

徳島へ「浦和レッズ」の応援遠征の帰り、一人で四万十川に会いに行った。七月の下旬、流れは穏やかで、沈下橋を渡った。水量は多く正に清流であった。沈下橋の先には瀨場があり、徐徐に青色が濃くなり、深さを教えていた。沈下橋の袂には、「鮎尽し」の看板の料理店、立寄らなかつた事、

後悔している。後日この話を妻にしたら、「そこへ私を連れて行きなさい」と怒られた。まだ実現していない。

うららかやホイップ山盛りパンケーキ

新都心コクーンの春の昼下り、中庭に面したカフェパンケーキ屋さん。行列が出来ていた。二階のテラス、手摺に寄り掛かり下を覗いていた風景である。店の外のテラス席、若いカップルに運ばれたものは、ホイップがスカイツリーの様に高く積まれたパンケーキ。どう食べるのか、興味津津見ていた。カップルも笑いながらどうしていいのかわからない様子。楽しそうである。私もいつか食べて見たいと思った。お相手を想像して心が蠢めいた。

焼鳥屋常連さんの深き皺

この辺の「焼とり」はほとんど「焼とん」である。私は「焼とん」の方が好きで、行き付けの店がある。店に行くのは早い時間がいい、開店を待つことも。自分の好きな席に座る。顔見知りの客に目で挨拶する。常連はいつも一人、いつもの席、いつもの酒、肴である。皆顔は浅黒く逞しい、静かに飲んでいる。時折おやじや常連との掛け合いで笑うと、額や口元に皺が出る。その皺は、髭面と相俟って、男の生き様を語っている深き皺である。

私の三句

大塚茂子

点呼とる瀨に鶯谷渡り

秩父郡皆野町大字国神小学校、中学校に私は九年間通いました。九年間一クラスのみで、のびのび楽しい学校生活を送りました。小学一、二年生の遠足は歩いて長瀨に行きました。

長瀨は、年が明けると間もなく蠟梅が宝登山の麓まで香り、春は桜、夏には川遊び、秋には紅葉と、一年に何度となく訪れています。

長瀨に遠足に来た子供達の「点呼」を、担任の先生が取って、その声に負けず劣らず、川岸から鶯が鳴き出して、賑やかな音のハーモニーとなりました。掲句はその景を詠みしました。

饒舌な娘と聞き上手なる子亀るて

わが家には、とても動物好きな孫がおります。動物なら大きくても小さくても何でも良いのです。お祭で買って来てもう三年飼っている亀のお話です。亀を連れて帰ると、まず直ぐに名前を付けました。手に乗せてまるで赤毛のアンの様に、次から次に切れ間なく話しかけています。私はその様子を飽

きずに後ろから見ていました。亀は喜んで、子供の話を聞いている様に見えました。

秋蚊寄る内緒ばなしが聞きたくて

早起きの夫が起きます。それでも私はうとうとと気持良く寝ていると、毎朝のように私の耳元に羽音が…。蚊がまるで私を起こしに来るのか、それとも話があるのか…。私は頭から布団をかぶります。そんな戦いを二度三度いつの間にか、寝てしまいます。この蚊はどうやら、私のベッドの脇の筆筒から食み出したドレスに隠れていたのでしょうか。大分長い間住みついている様子です。しかし私がこんな俳句を詠んでから、急に現れなくなりました。私に一句を授ける為に、亡き父母兄友の誰かの化身かも知れないと、ふと思いました。

こんな俳句を、網野月を先生に、山紫集の巻頭に選んで頂き、本当にありがとうございます。山紫集は、一句のみの出句ですので、此の一句に絞る難しさと、楽しさがあります。選考委員の皆様有り難うございました。

新同人紹介

— 令和5年 —



飯塚智恵子

水明入会 平成二十六年
所属句会 水明藩つくし句会

ほどくまで幾たび迷ふ梅の花
フレアーの裾もて遊ぶ大南風
ゆれ惑ふ心定まり紫木蓮
夕風に波を紡いで睡蓮花
故郷へ積乱雲を引き連れて

俳句する楽しさや嬉しさが薄れてしまいそうな時、その度に頂く温かな励ましの声やお手紙のおかげで、なんとか続けてこられました。温かな友、美しく逞ましく駆けてこられた大先輩に感謝です。激変してゆく環境ですが句会をオアシスとして歩みたいのです。



石浜悦子

水明入会 令和三年
所属句会 蘭の会

ヒヤシンスにほふ窓辺のミルクティー
夕映えの木立の中の残花かな
金木犀午後の紅茶も琥白色
しらす干しでつかい夢もあつたるな
クリームのドレスが似合ふ冬苺

この度は水明同人にお迎え頂き有難うございます。奥深く難しい俳句ですが、月を先生や温い句友に恵まれ拙い句ですが、心の赴くまま楽しんでいきます。日々の生活が作った句から鮮やかに甦り自分の足跡を辿る事ができ感謝です。これからは自己満足だけでなく精進したいと思います。今後共よろしくお願い致します。



遠藤人美

水明入会 令和元年
所属句会 水明藩つくし句会

着流しの力士に会釈花の午後
ロープウェーいざ万緑の只中へ
青林檎時に酸っぱき娘の言葉
そつぽ向く蛸から売れしおでん鍋
風折れの枝の再生今朝の春

この度は水明俳句会同人にお迎えいただきありがとうございます。俳句と出会い、生活に張りができたことを嬉しく思います。経験も技術も詩心も及ばない私を句会の大先輩が励まし続けて下さいました。御縁を大切にこれから学び続けていきます。今後ともどうぞよろしく御指導下さい。



川島夕峰

水明入会 令和三年
所属句会 繭の会

朝顔の替はる替はるに競ふ花
柿落ち葉掃きてなほ掃く在りし母
水澄みて川底濁すどぢやうかな
退屈なねこ呼びませうか嫁が君
蠟梅の下向くほどに美しき

この度水明同人の委嘱状を戴きまして誠にありがとうございます。
ざいます。
以前から漠然と俳句をやりたい気持ちがあり「はじめての俳句教室」からスタートいたしました。が、漢字が読めず書けず、俳句用語の意味もわからず等しいぶん苦労しました。
まだまだ未熟ですが自分らしさを大切に一步一步確実に前進したいと思えます。



後記朝香

水明入会 令和二年
所属句会 蝌蚪の会

「凍蝶、哀し」一行のみの日記かな
朝まだき馬酔木の房の白々と
積ん読の整理半ばの薄暑かな
金魚袋幾度ものぞき帰る児や
ぬか漬の色鮮やかや涼新た

この度は同人にご推挙頂き有難うございます。コロナ禍で投句のみでしたが、今は句会に参加させて頂き、月を先生のご指導のもと句友の皆様と学びを楽しんでおります。
季節の移ろいや日々の暮らしに目を向けて、少しでも句が上達しますように精進致します。
今後ともご指導宜しくお願い致します。



小山あつ子

水明入会 平成三十一年
所属句会 櫟の会

風光る靴ぬぎ捨てて兎は走り
藍浴衣肘笠雨の強きこと
直照りに美しき屍黒揚羽
樽酒の表面張力居待月
日めくりの虚ろな薄さ十二月

この度は同人にご推挙頂きありがとうございます。今日まで所属した句会での先生方、そして諸先輩方に御指導頂きましてここまで続けて来られました事を感謝しております。俳句は奥深く難しいですが、何とか自分なりの言葉を探し表現できたらと悪戦苦闘しております。伝統ある「水明」の名を汚さぬ様、努めて参る所存です。



篠原さよ子

水明入会 令和四年
所属句会 薊の会

駆けつこに踏んづけられる陽炎よ
風走り荒波たつや麦の秋
夜の秋他言無用でペンを置く
落葉朽つ人影のなき獣道
水澄むや柄杓作法の四畳半

このたびは見識もなく未だ未だ手探りの身に同人への推挙ありがとうございます。私は家庭菜園をしており季節に応じた野菜作りを楽しんでいます。俳句を通して今迄以上に日本の美しい四季を見直し、季節を意識して無理なく俳句を楽しみ彩り豊かに時を歩んでいけたらと思います。月を先生の丁寧なご指導、句友の皆様のお力をお借りして勉強したいと思えます。これからもよろしくお願いいたします。



清水桂子

水明入会 令和三年
所属句会 俳句の手ほどき

アンニユイと呟いてみる花曇り

団長の長き鉢巻青嵐

秋の夜の句集に潜む江戸気質

秋深し空想癖の恋女

田に一羽ナルシストめく寒鴉

この度は同人に推挙頂きありがとうございます。不思議なご縁で導かれてきました。

水明誌を購読し、月を先生の添削を受けていました。半年過ぎた頃主宰から今の句会へお誘いを受け二年目です。

尊敬する主宰はじめ優しい先輩達と同席させて頂く幸せを感じながら学ばせて頂いて居ます。



嶋田洋子

水明入会 平成三十年
所属句会 和歌山水明句会

立葵女王のごとく庭占領

忘れまじ八月六日のきのこ雲

朝顔のカラフルカーテン西の窓

ひと雨が欲しいと鍬打つ塩爺々

検査良し孫も引き連れ鰹料理

褒め上手な大橋旭代さんにご指導頂きながら何とか皆様の仲間に入れていただいています。今後共宜しくお願いいたします。



霜多光代

水明入会 令和二年
所属句会 皐月の会

陽炎や行き交ふ人の静かな目
菜の花は平和の色やわらべ唄
陽炎へる草のうつろひ童子仏
寒椿かなしき裏むほど深紅
父の日や遺愛の「ライカ」箱に居り

この度は伝統ある水明俳句会同人の委嘱状を戴きまして誠に光栄に存じます。

山本鬼之介主宰の温かく魅力的なお人柄でご指導下さる熱意は毎回得る事が多く楽しんでございます。先生方、句友の皆様感謝しながら精進してまいります。どうぞ今後ともご指導下さいますようお願い申し上げます。



藤川比早子

水明入会 令和四年
所属句会 繭の会

井戸を掘り種まく宵の明星や
ホーホーと闇夜に交はす青葉木菟
南風迷蝶つれて海わたる
秋暁や東の空に惑ふ星
立冬や夕日に向かひ汽車は出る

この度は同人にご推挙頂きありがとうございます。お題を提示されると深層心理のように、内から発する言葉が浮かび上がってきますが、句意が伝わらないこと屢々です。なかなかよい句を作ることは難しく学びの身です。ゆっくりと納得のいく句を目指し励んで参りたいと思っています。

どうぞ今後ともよろしくお願い致します。



鳴海順子

水明入会 令和三年
所属句会 皐月の会

旨味ギュツ焼いた蚕豆莢の山
父の日やセピア色なるパナマ帽
秋立つやえいと蹴り上げ逆上がり
更くる夜に切絵の世界枯木立
冬耕や土間に地下足袋温くあり

「同人」何と重い二文字なのでしょう！

私にとりましては、正に青天の霹靂です。重く重く身の縮まる思いで、主宰のお言葉を頂きました。幾晩も悩み考えました。やっぱり私には荷が重過ぎる……。。

アドバイスを頂きました。

気負わず私らしい俳句が出来たら良いのだと。



持永喜夫

水明入会 令和三年
所属句会 若鮎句会

竹の秋背丈に合はぬランドセル
鴟日和古郷の山に母を抱き
大漁や波頭の先に石路の花
耕人の声豊作の予兆あり
短夜やマニキュア拭ひ泣いてみる

この度、同人にご推薦頂きました持永喜夫と申します。

別所沼公園での俳句教室に参加し、遊歩道の枯葉から「肩先にひらひらこぼれてる」という歌詞を思いだした日からの始まりでした。何が良いのかもわからず、試行錯誤するほどの知識ありませんが、生きることの面白さを言葉にできたらと思います。



吉川拓真

水明入会 令和三年
所属句会 若鮎句会 第一例会
円卓の会

五月雨や一草庵のりんの音
梅雨の夜やペットボトルの音が鳴る
向日葵も化学反応して生きる
隣人を愛せよ建国記念の日
去年今年皆勤賞の置時計

この度は水明の新同人に委嘱していただきありがとうございます。
水明という伝統ある結社の新同人に就任することは身に余る光栄です。自らも水明の歴史の一人に加わるのだという感慨があります。先人達の熱き魂を受け継ぎ、俳句の道を皆様と究めていきたいと思えます。俳句と共に四季を感じ、日常の感動を味わってまいります。



綿引まりこ

水明入会 令和三年
所属句会 蕨の会
りんどう俳句会

沼底に神の足音 春祭
店名は「天手古舞」よ山笑ふ
夏めくやロックライブへ向かふ古希
葉隠れの青梅ほのと紅をさす
寺町の琵琶の妙音月涼し

この度は同人に御推挙頂きありがとうございます。鬼之介主宰、月を先生、句友の皆様のご指導に心より御礼申し上げます。
伝統ある水明俳句会との出会いに感謝し、日々の暮らしを大切に俳句の道を行きたいと思っております。
今後ともよろしくお願い致します。

九月号の巻頭句

季音 雪

白鷺の一步一步の歩みかな

星野和葉

季音 月

花莫塵の藍に白波立つ心地

梅澤佐江

季音 花

二人居の風と思へば団扇かな

青木鶴城

水明集

琵琶胸に飛天の笑みや梅雨の闇

池田珪子

鼓笛集

ソーダ水八十路の今もソーダ水

清水桂子

山紫集

出不精と頭痛を連れて梅雨来たる

山中いちい

俳誌望見 染谷風子

「馬酔木」

令和五年七月号 通卷一一九三号
主宰 徳田千鶴子 発行所 東京都杉並区

大正十一年、東京市四谷区で創刊。創刊時の誌名は『破魔弓』。編集発行人は佐々木綾華。謡と俳句とを併せもつ内容の雑誌であった。俳句の選者は内藤鳴雪・池内たけしなどがあつたが、水原秋櫻子をはじめとする東大俳句会同人が関わるようになって俳句誌となり、昭和三年七月号から『馬酔木』と改題。同号に「改題の辞に代へて」として秋櫻子は、「馬酔木咲く金堂の扇にわが触れぬ」の一句を掲げた。(以上、角川学芸出版『俳文学大事典』より)

巻頭に秋櫻子の

池五つ清水引き足らひ鱒を飼ふ 『霜林』

が掲載され、同人の小野恵美子氏により同句は埼玉県名栗村での作で、「引き足らひ」という字余りの工夫で、水の清さ豊かさが見事に表現されている。これに至るまでどれほどの推敲がなされたのだろうか。との解説がなされている。

「旅路なほ」と題する主宰詠七句より三句。

次の世は自由気儘に天使魚

蘇る命ありけり新茶汲み

旅の途の草笛吹けばなほ淋し

「七月集」は、当月集同人六六名による三三〇句の力作揃いである。それより五句。

連綿の仮名文字ひそむ糸桜 岡田貞峰
岬端の風無限大夏来る 小野恵美子
裏向きにパジャマはためく建国日 那須淳男
阿蘇五岳枕に昼寝はばからず 工藤義夫
何処までも夢ゆれ止まぬ白牡丹 ほんだゆき
「風雪集」は同人五六名、二八〇句が掲載され、最後に主宰選十五句が選出されている。それより五句。

はたた神すべり落ち来る草千里 野坂民子
言ひ切れぬ言やビールの泡こぼれ 堀田順子
花の種蒔きて今日より復職す 渡部恭子
マリンバの音の撥ねるる新樹光 林八重子
手の中でインコの眠る聖五月 谷 陽右
「馬酔木集」は主宰選で投句者は全国に及んでいる。五句投句であるが五句入選者はなく、四句入選者三三名、三句入選者一六五名である。四句入選句より私の個人的な共感句を三句。

覚めぎはの夢のあと引く春障子 藤井彰二
言ひ分けの云へぬ齢や夏隣 宮野照子
春愁やかまずに溶ける砂糖菓子 廣田幸子
昭和九年、秋櫻子が主宰・発行者に就任し、以後数多の俊英を輩出した本誌を拝読できた事は私の大きな喜びである。

山本 鬼之介 選

夏
季
競
詠

兼
題



〔団 扇〕 傍題可

〔夾竹桃〕 傍題可

〔保〕 (詠み込み) 夏の季語で詠む

さいたま 柚木治子

渴筆の一句の風姿古団扇
苛立つる女のしぐさ京団扇
一瞬の団扇の黙や大相撲
身を保つ虫を隠すや風鈴草
神話聴くオーシャンビユーや夾竹桃

川口 矢作水尾

保育器より今日退院す雲の峰
百葉にまさる団扇の風心地
一芸に秀でし人の京団扇
マロニエの花咲く丘の保育園
夾竹桃のホテルに海の照り返し

和歌山 大橋勉代

京団扇土佐芝居絵にちづくす
絵団扇の蛙の吐けるほむらかな
横綱へ白真四角の大団扇
夾竹桃男もすなる薄化粧
木天蓼の花折りくれし保安帽

大阪 由良ゆら女

団扇風富嶽の波の彼方から
五石釜据えて典座の古団扇
一雨の洗ひし街や夾竹桃
返答に窮し絵団扇裏表
黙袴に膝よりすべる団扇かな

見番に団扇きちんと置かれをり
日本の団扇の風に眠る稚

さいたま 梅澤輝翠

花とべら威光を保つ尼僧庵

日盛りや保津川下りしぶき攻め
夾竹桃の盛りの隣家売りに出る

白団扇草の庵に墓ふたつ

絹団扇竹人形のある館

叡電の二ノ瀬の駅舎京団扇

昼四つの鐘なる村や洪団扇

江戸前の寿司屋で一献夾竹桃

若狭 檜鼻ことは

みどり兎に風のそよめき白うちは

久喜 梅澤佐江

団扇持ち黒田清輝の絵を気取り
夾竹桃かつてキューポラありし町

爆心地殊更赤き夾竹桃

おはぐるとんぼ肩に保津川下りかな

白暖簾一保堂に夏来る

弄ぶ団扇の先の甘き夢

八月の夾竹桃は魔女の舌

真相は決して語らず夾竹桃

俳諧と団扇現在過去未来

さいたま 日高道を

おほほの口を隠す女の京団扇

夾竹桃フェンス囲ひの駐輪場

カーテン仕切る熱中症の保健室

間延びする下戸の相の手古団扇

夾竹桃咲くやローマの旧市街

さいたま 境 延昭

若狭 鳥羽和風

熔接の地を這ふ火花夾竹桃

夾竹桃喘ぎて止まるオートバイ

組板に鱈打つ魚や洪団扇

朝湯して旅の心地の団扇風

昼寝の子手足ばらばら保育園

石井喜恵

熊谷 越田栄子

裏木戸に音を残して夾竹桃

縁台に歩が裏返る団扇かな

色褪せし畳匂はず古団扇

中庭に石打つ竹や夾竹桃

白団扇置屋を飾る芸妓の名

原子炉の水の行方や夾竹桃

泥んこの野球少年夾竹桃

風情ある木目の座卓京団扇

涼風やしばし流るる保留音

保護猫の耳に目印木下闇

面影は昔を留め背に団扇
半世紀想ひを保ち祭の夜
乗り越えてこそその試練ぞ夾竹桃
されきれの団扇さばきや男帯
夾竹桃口の悪さは生まれつき

さいたま 青木鶴城

白団扇妻より淡きシャボンの香
奥の間に義父の賓客京団扇
炎帝立つ大利根「天保水滸伝」
洪滞の車中団扇の慌ただし
首塚の頷く夜の夾竹桃

横浜 正木萬蝶

版下に流し目の女絹団扇
語り継ぐ井上流の京団扇
手古舞は片肌ぬぎよ夾竹桃
絵団扇の美女ふと鬼女に見ゆる夜
保元の美女に会ふ夢団扇風

大村節代

さいたま 網野月を

引越や夾竹桃は残されて
こんな木でも母の愛した夾竹桃
色神や映える映えない夾竹桃
夾竹桃宅配使用ポストかな
建売の細い間口の夾竹桃

鳥遙か卯波逆巻く美保関

五明 昇

絵団扇や襟元ゆるく母在す
縁台へ出張る団扇と翔平讃

松井由紀子

夾竹桃磯着の乾く浜通り
白南風や下駄音弾む伊香保の湯
勝機いま団扇の挙がる応援歌
夕焼空佐保路に高き塔の影

夾竹桃静まりかへる村の昼
坂に生ひ坂に影差す夾竹桃
炎熱の保身はふたつ無為と水

浮世絵の団扇をそつと額の上

石山かつ子

絵団扇の楊貴妃に風もらひけり
料亭に京丸団扇はんなりと

横須賀 大場順子

山間の牛舎夾竹桃の花ざかり
正装の絹の団扇を展きをり
ニュータウン今は古りたり夾竹桃
保育所の声の大きな日焼の子

凜といふただ一文字の白団扇
広島や折りの白の夾竹桃
保母が先づ眠つてみせて昼寝かな

親不孝詫びて母への団扇風
飯台の酢飯をあふぐ洪団扇
駅の西口袋小路の夾竹桃
角打ちの仲間病欠夾竹桃
撫山の保水の力滴れり

さいたま 洪谷きいち

没落の富農屋敷よ夾竹桃
五十年よくぞ耐へたり古団扇
渾身の一句を書かむ白団扇
洪団扇大あぐらして「おーいお茶」
夏座敷唸る「天保水滸伝」

さいたま 染谷風子

産土神の小さき鳥居や夾竹桃
夾竹桃の盛りのなかの筆塚碑
母の世の艶失はず絹団扇
破けても使ふ昭和の洪団扇
保護犬の目つき鋭き稲光

川口 森川義子

北斎の浪の絵団扇跳ぬる富士
独房に陽はまた昇る夾竹桃
一点差保ち九回鶯青葉
渡良瀬の上訴受難碑夾竹桃
足袋蔵やマラソンシューズの絵団扇

行田 近藤徹平

工場を囲む防壁夾竹桃
夾竹桃かつて戦場たりし島
貫ひたる風もはんなり京団扇
過保護なる金魚の五衰兆しけり
万緑を映す保津川舟下り

上尾 横山君夫

着流しの帯に差したる洪団扇
うりざね顔の夢二画気どり京団扇
夾竹桃言葉のいらぬ二人かな
夾竹桃戦後も喜寿を過ぎにけり
保線夫のヘッドランプに大蛾来る

さいたま 保坂翔太

モデルハウス団扇片手に客を待つ
京うちは浮世絵美人囁けり
大ゆやけ記録保持者の目に涙
洪滞の街に保冷車父の日よ
立て札に「遊泳禁止」夾竹桃

川口 野田静香

おこしやす薄茶と共に京団扇
棧橋を団扇手に手に渡舟客
団扇手に平城宮址そぞろ行く
本堂の隅に重ねて古団扇
夾竹桃海まで続く熔岩の道

明石 田寺玲子

愛ちやんを思ふ縁の絹団扇

若狭 島津初花

湯上りに選ぶロビーの京団扇

和歌山 十倉和子

もてなしの作法も一芸洪団扇

絵団扇の牛若丸にふと旅情

親元の風呂炊く土間の古団扇

視野に置く師の一筆のミニ団扇

夾竹桃にやさしい風の吹くことよ

夾竹桃あの日の玉音よみがへる

驟雨なか保母の見送り透明傘

風入や零余子句集保存版

唯しあふひよつとこ顔の目と団扇

さいたま 曲淵徹雄

保健室に来る少年の鬱鉢朝顔

横浜 永野史代

着流しの腰に絵団扇男だて

香りよき風令夫人の絹団扇

病院の端に煙突夾竹桃

父の眼遠しいま広島の夾竹桃

夾竹桃ブレーキ効かぬ下り坂

風匂ふ左に団扇右に筆

保安灯にいつ止むとなき蟬の声

先づ保健室覗き少年の夏休み

襟足の美しきをみな京団扇

神戸 森本早苗

平素から飾らぬ母の洪団扇

深谷 井上燈女

男踊りの団扇も弾む阿波の夜

俳句書く気持で買ひし白団扇

夢の国へ誘ふ父の団扇風

花と根に毒もつといふ夾竹桃

炊き上がるくぎ煮一気に洪団扇

焦土と化したあの頃思ふ夾竹桃

振り鉢巻備長炭には洪団扇

保線夫の鉄柵に干す夏帽子

人混みを腰で分け行く古団扇

さいたま 丸山マスマ

黙禱の身を保ちたり夾竹桃

さいたま 椎野美代子

江戸の風生む棟梁の洪団扇

戦火あり川の両岸夾竹桃

夫の弱音ふはりと逸らす京団扇

夾竹桃まざと兜太の声をきく

九十九折に喘ぐ銀輪夾竹桃

ゆるぎなき凶太き揮毫白団扇

保健室に常連二人青鬼灯

反戦の署名団扇の風もらふ

抱き寄せてさて絵団扇の置き処

天平の美人画のごと手に団扇

工場は昼夜操業夾竹桃

立行司仕切り千本団扇止む

炎天の神保町のジャズ喫茶

さいたま 小林京子

二匹目も保護犬を飼ふ夏の夕
保健所の静まりかへる油照

魚町の寂れし通り夾竹桃

JR西日本窓口で団扇二種

男持女持あり京団扇

相模原 町野広子

青竹の切り口白し団扇挿す

酢を打ちて団扇の風を桶の飯

父の忌や乞ふて一枝夾竹桃

廢屋や夾竹桃の燃えさかる

「徳川」の矜恃を保つ夏館

池田珪子

洪団扇かたへに置きて主座の人
絵団扇の風に揺らめく歌舞伎幕

夾竹桃ノイズ・玉音空耳に

夾竹桃ルージュー一つで悪女の相
麦の秋酒保にもありぬ蒸留酒

東京 菊池ひろこ

この快晴夾竹桃の咲きつぷり

保健室ベッドに見ゆる夾竹桃

旅芝居見せ場に客の団扇鳴る

ハイウエーどこまで一緒夾竹桃

怪談に団扇の止まる夜の寺

西幅公子

絵団扇の女切れ長風匂ふ
叩かれる運命とならむ洪団扇

スタンドの声援団扇荒使ひ

夾竹桃に推され離しぬ免許証

杏子煮て保存容器にきらきらと

さいたま 星野和葉

夾竹桃マイナンバーを持つ持たぬ

夾竹桃咲き満つる蔭にヘルメット

夾竹桃真昼の闇の耳総し

下校のチャイム夾竹桃の真つ盛り

背後より風の銃口夾竹桃

茂木和子

児を寝かす婆の団扇の止みにけり
夾竹桃廢家は更に小さくなり

慎ましき母が備へし古団扇

高速のグリーンベルトや夾竹桃

胡弓の音越中八尾の団扇風

若狭 松宮保人

鮮度保持先づは一粒サクランボ

高崎 原田 秀子

「せやせや」と鯨背な法被背に団扇

浮世絵の粋な絵柄や江戸団扇
酢飯切る定位置にある古団扇

さいたま 清水 桂子

番台で睨みをきかず洪団扇

爽竹桃園児ら燥く箱車

寝顔みてそつと団扇の風おくる

風鈴や伊曾保寓話を子に聞かす

猛毒のありとも知らで爽竹桃

百日紅保養所までの道標

絵団扇を腰に乗り込む屋形船

川崎 鈴木 康世

生家にある祖母の使ひし洪団扇

どつと来てこなす保線や日の盛
出番なき厨の隅の古団扇

岡田 宣子

二筋の飛行機雲や爽竹桃

やはらかに古団扇の風をみどりごに
爽竹桃の紅が彩るハイウエー

富士塚に爽竹桃の白清し

爽竹桃咲く頃夫の人事異動

緑蔭に保育児を連れ保父と保母

爽竹桃の赤長崎にヒロシマに

草加 河野はるみ

高速の爽竹桃やさつと遠し

くるぶしを撫づるをんなの団扇風
日盛りの仙人掌隠す保安林

伊奈 菅原 卓郎

夕涼み会おんぶにだつこ保育園

炎天にめかす保護猫譲渡会
救急車響く屋敷の爽竹桃

縄のれん絹団扇置く指定席

寝かす子にすぐ寝かされる団扇かな

ランプの夜寝床に二柄の洪団扇

保健室灯りぼつんと戻り梅雨

さいたま 菅原 真理

古団扇夕日の匂ひ混ぜ込んで

せせらぎの聞ゆる旅寝の団扇風
湯上りのほてりを癒す団扇風

さいたま 井上 玲子

屋敷跡爽竹桃は秘密めく

爽竹桃の香りを残し日昏けり

爽竹桃黙して青き空で咲く

緑蔭を保つベンチに詩集読む

絵団扇や思はせぶりな風送る

千年を保つ古刹や蟬時雨

気に入りの絵柄の団扇腰に差す
波団扇しつかりと風起しけり
夾竹桃父母無き家に咲き乱れ
夾竹桃生家に残る津波跡
夏草や砲台跡に保育園

さいたま 高島寛治

爆心の地の息吹かな夾竹桃
夾竹桃風を抱き寄せ踏ん張りぬ
古団扇裏に掠れし弟の名
串焼をあふぐ団扇や役所前
日盛やオルガン響く保育園

越谷 阿部幸代

広告は富山の葉古団扇

池田雅夫

さいたま 皆川更穂

もの思ひの今宵止まらぬ古団扇
陋巷ろくがうの噂掻き消ゆ夾竹桃
あかときに夾竹桃の白き影
錦鯉に保険を掛くる極暑かな

手に生えし鱈の煽りよ古団扇
湯上りの白肌の婀娜絹団扇
廃屋の歴史を秘むる夾竹桃
独り居の母の矜持や夾竹桃
保育園の指おづおづと昼寝寛

応援の団扇は華の国技館

大和 藤澤喜久

あれこれと美人を選ぶ団扇かな
船酔ひや船の畳に古団扇

本橋稀香

鮎のれん団扇でくぐる馴染客
渋うちは五右衛門風呂の竈口
幼馴染と団扇片手にへば将棋

我が空は航路となりぬ夾竹桃
保湿とや女バックす夏の宿
かちわりや金管楽器も保冷して

水鉄砲の的は保育士敵多し

さいたま 緒方みき子

太平洋海保の船が飛魚と
四年越しはつびの腰に挿す団扇

吉川 杉浦千祐

お揃ひの団扇を彼の帯にさす
手作りの絵団扇ほのと甘き風
憂鬱を払ふ負けん気夾竹桃

安保の日日や炎天に聞く拡声器
夾竹桃束となりゆく出さぬ文
再会の返事は保留夏の恋

寡婦の手の団扇の風よ去りがたし
東方聖地西方浄土団扇風

女子学生のみ只の銭湯夾竹桃
保冷バッグのワイン薔薇色巴里祭
生きろよと団扇が叩く児のあたま

泣き疲れ伏す子にやさし白団扇
アイドルの団扇をかかげ空車待つ
好きな子の家の呼び鈴夾竹桃
夾竹桃先祖代々宮大工
保護犬を語るピアスの夏旺ん

団扇風はんなり送る若女将
はにかみて絵団扇胸に抱く少女
病窓の夕影かをる夾竹桃
保護犬の蹲る道青嵐
みづうみの青さを保つ皃月富士

秘伝の垂れを守る親爺や洪団扇
返答に窮し団扇に逃れをり
配られし団扇に和む旅の人
敗戦を語り継ぐひと夾竹桃
寢息を立つる保育園児や合歡の花

さいたま 森下山菜

東京 石田慶子

さいたま 霜多光代

笹本啓子

夕去れば寝ぬる子供に団扇風
待つ宵のダンスパーティー京団扇
紅の色彫よかに夾竹桃
人知れずそつと咲きある夾竹桃
青田風緑地保全の見沼郷

新品の団扇の風のよそよそし
母たちの疎開の話夾竹桃
君の住む二階角部屋夾竹桃
保育士も午睡をしたき十三時
保健室のカーテン真白大南風

寝返りへゆつたり使ふ団扇かな
沈黙のかけらを拾ふ団扇かな
排ガスに負けじと咲くは夾竹桃
夾竹桃便りなき人ふと想ふ
少子化の森で保育に悩む夏

紫陽花のふくらむ窓辺保健室
向日葵や保育園児の夢の丈
祖母の家の盛り土のり面夾竹桃
手料理をさますや祖母の洪団扇
碁敵の忙しく扇ぐ古団扇

さいたま 宮崎チアキ

東京 石川理恵

さいたま 篠崎紀子

加藤でん治

動物園の空つぼの檻夾竹桃

さいたま 内田恵子

夾竹桃色あざやかなサブリメント
ベリーショート少女壮快夾竹桃
大団扇天狗の鼻の尖りくる
絹団扇浮世絵美人の態をして

夾竹桃千人針を為せし母

熊倉千重子

置屋あと夕日まみれの夾竹桃
嬰兒に添ひ寝うちはのやさしさよ
仲見世や「オー」と団扇を買ふ異人
児等笑ひ向日葵笑まふ保育園

眠たげな母に団扇の風送る

下川光子

手書きして唯一無二の古団扇
さらさらの絵団扇胸に皆少女
夾竹桃貧血気味なピンヒール
紫陽花や今日も誰かの保健室

兵児帯の腰に団扇の恋の夜

若狭 飛永 鼓

おしやれして団扇を腰に初デート
甲子園に届け声援夾竹桃
駅出でて吾夾竹桃に迎へられ
父の威を保ちてゴルフ談議かな

鴻巣 大塚茂子

広島の雨に色濃き夾竹桃
広島の誰に手向けん夾竹桃
夾竹桃里の学校寺の庭
噴水の申し分なき丈保つ
保育園の昼寝に団扇風おくる

さいたま 新 暦文

縁台の勝負を煽る洪団扇
特攻の知覧に白き夾竹桃
腕組んで耳打ち隠す団扇かな
夾竹桃焦土の街に咲きにけり
保育園の好きな子狙ふ水鉄砲

横 浜 福田千春

帯に挿す団扇いなせや神田つ子
古団扇酔めしは母の塩梅に
子を寝かす団扇の風や膝枕
叫声の保津川下り夏の雲
夾竹桃征のつく名の友多し

さいたま 反町 修

寝入る子に団扇の微風昼下り
夢二展伊香保の街の浴衣掛け
静かなる湖畔の佳人絵団扇を
陽に負けぬ夾竹桃の並木道
硝子越しばたばたと洪団扇

踊り手はホテルのおかみ京団扇
曲替はり団扇を腰に輪の中へ
夾竹桃咲いて外れのジャンボ籤
夾竹桃反戦語る媪かな
山百合の孤高を保つ古戦場

杉戸 佐々木史女

花栗や保育器の児は青年に
絵団扇やかつて色町繁華街
へつつひの残りし土間の洪団扇
毒持つも魅力のひとつ夾竹桃
筆踊る絵手紙サークル白団扇

鬼石 野口和子

手作りの団扇で冷ます酢飯かな
いみじくも一句そへたる白団扇
京団扇古き筆筒の奥底に
人を待つ風情廢家の夾竹桃
伊曾保物語読みゐる夜の秋

平塚 丸屋詠子

丑の日の香り届くる洪団扇
団扇もて煽ぎつこする兄弟
夾竹桃斬らば滴る毒の乳
色淡き夾竹桃や鯖街道
半夏生だーれもぬない保健室

さいたま 飯田忠男

戦後と言ふ言葉は失せず夾竹桃
状差しに定規封筒古団扇
土俵下に千の団扇の熱き風
鬼門角に夾竹桃の赤きこと
団扇風シャツの第一ボタン開け

若狭 山崎郁子

卓上の団扇の数や祖母の家
団扇から吹く風にある命かな
夾竹桃ルールはときに苦しみに
夾竹桃リセットできる人生を
保冷剤三十分の暑さかな

吉川 拓真

玉音の昭和も遠し夾竹桃
夾竹桃戦死の父は輜重兵
夾竹桃戦後の主婦は強かりき
賜りし団扇に光る師の一句
保護色と言へども目立つ雨蛙

さいたま 荒井俱子

夾竹桃母校消しゆくシャベルカー
恋に少し毒が葉味や夾竹桃
広告の団扇の風の生温し
鰻屋の親父も古りし洪団扇
保健体育見学だった暑い夏

町田 瀬戸雄二郎

夏草や葉先に保つひとしづく
散り際は可憐な少女夾竹桃
銭湯や生まれしままへ古団扇
ミステリー月を制して夾竹桃
泥沼に貫く愛よ夾竹桃

大阪 飯塚智恵子

海渡る日本土産の京団扇
二三本ひごの折れたる古団扇
目撃者捜す看板夾竹桃
夾竹桃果たせぬままの恋懺悔
梯子架くバランス保ち実梅もぐ

若狭 松村登美江

団扇手に掛け声「やつとさ」進みけり
夢うつつぱたりぱたりと団扇風
保護犬の瞳の中の火花かな
囲み咲く夾竹桃やガスタンク
渋滞や夾竹桃の続く道

さいたま 樋口元美

くづし字の古団扇より緩き風
児のすやすやとロマンスカーの団扇風
夾竹桃のさらなる紅や古戦場
ベビーカーの背に保冷剤夏旺ん
保土ヶ谷宿を辿るふたつの夏帽子

川崎 鈴木玲子

光り合ふ天守の鯨や夾竹桃
担ぎ手の熱気沸騰大うちは
波団扇片手に煽ぎ酢飯切る
添ひ寝する母の団扇の先に寝て
ペディキュアの跳駆け来る三保の浜

森 和子

団扇手にねぢり鉢巻大鳥居
七厘で魚を焼く手洪団扇
君に告ぐ夾竹桃の花咲けば
栈橋の袂に咲きぬ夾竹桃
技競ふ保健体育土用波

さいたま 山田美佐尾

房州の窓ある団扇風やさし
掛け声に合はせる団扇波となり
夏の空七冠保持の若き才
夾竹桃ねぢれ八重花天に伸び
夾竹桃高速道路に紅を注す

小駒さち子

踊り手は団扇主役の男衆
捨てられぬ破れ焦げある洪団扇
草むしり頼りにするは保冷剤
竹製の団扇の風の切れの良さ
焼鳥の匂ひ烈風洪団扇

駒谷行雄

まどろみは祖母の団扇の甘き風
ほろ酔ひの襟元隠す団扇かな
さはしの動かざる影夾竹桃
夾竹桃涙のしづく流れ落つ
桐箱に恋文保つ夜の秋

さいたま 綿引まりこ

珍しき友のお世辞や夾竹桃
我愛づる怯者の触れぬ夾竹桃
山水の墨痕軽き古団扇
絵団扇や猿と兎の沢遊び
朝虹や保存のメール何処なる

さいたま 綿貫ひさの

白団扇挿して小粋な貝の口
暗闇にゆらりと届く団扇風
夾竹桃子らの声なき路地の奥
ハイウェイ飛びゆく紅の夾竹桃
保護犬の瞳なに色夏の空

寺町知子

絵団扇と足湯に並ぶ平和かな
絵団扇を背にする帯や蝶結び
なつかしき路地の板塀夾竹桃
街なかの空港せはし夾竹桃
万緑や子女より保母の声高し

秋谷風舎

角帯に団扇を挿して踊の輪
床に臥す子に絵団扇の風やさし
りハビリの一步一步や夾竹桃
保護鳥の癒えて夏野に放たれぬ
保育器の赤子手を伸べ立葵

後記朝香

山車の音駆け出す児等の背に団扇
老鶯の貫禄保つ声の張り
雲の峰平和を保つG7
夾竹桃探しに路地を一廻り
牧師住む教会彩る夾竹桃

藤 沢 小島喜代子

夾竹桃世辞のひとつも言へぬ君
吊橋や心保ちて雲の峰
病みつきて団扇の風の温かし
夾竹桃移り変はりは果もなく
水を浴び神輿担ぎや大団扇

鈴木香音子

団扇風仮寝の母のあつぱつぱ
手枕に畳目残し団扇風
夾竹桃ボール真際のホームラン
夾竹桃紅一点のツーリング
保線夫の炎天貼りつく鐵路かな

さいたま 森美枝子

海の風山の風来る団扇かな

所 沢 関根千恵

川 口 新井のり子

絵団扇の風解きながら江戸仕草

畜産の生命保ち草干しぬ
保険屋のペダル漕ぎゆく青田道
そばへ降り夾竹桃の華麗なり

波高き保津川下る船遊び

さいたま 後藤綾子

ありがたやひしめく市で得る団扇

さいたま 森下美智枝

夾竹桃紅白咲きて心足る

花咲くと見れば保護色の夏の蝶
児を煽ぐ団扇の風も休みがち
扁額の忍の一文字夾竹桃

紅白の夾竹桃の並ぶ駅
二メートルの大鰻保持水族館
冷たさ保つ溶けぬアイスの繁盛店
神保町の古本屋入る夏の雨

夾竹桃に矮鶏鳴き小さき卵生む

松本光子

春日部 仲田利子

保護樹林赤い夏帽会釈せり

ここからは鳥獣保護区著我の花
夏雲怪し保線工螺子締めに来し
ウルトラマンの団扇児は大の字に

店閉ぢし本屋に咲くや夾竹桃
山の昼箸にはならぬ夾竹桃
団扇もてひばりの歌を聞く深夜
夏休みの注意懇こん保護者会
佐保川のほとり歩めば昔人

産土に歳月ありし夾竹桃

香田裕誌

さいたま 横山礼子

京団扇帯に芸妓や神楽坂

恙なき八十路に適ふ古団扇
札所にて買ひし心経記す団扇
息災に暮す余生や夾竹桃

球場に荒波のごと白団扇
微睡の吾子と猫とに団扇風
白日のかくも似合ふや夾竹桃
首都高に光る点描夾竹桃
夏帽子島の保健師巡回中

神通力ありし天狗の団扇かな
みどり児のかすかな寝息うちは風
豆絞りの手拭きりつと大団扇
家系図のいとこはとこや夾竹桃
夾竹桃ゲリラ豪雨は天運に

和歌山 高橋満耶子

土俵下袴な着付けの京団扇
香しき風に酔ひたり京団扇
「焼き一生」壁に数本洪団扇
夾竹桃心変はりは人の常
片かげり神保町に映画館

さいたま 岡田芳春

襟足にかさこそ遊ぶ絹団扇
絵団扇や阿国踊りし河原かな
「コロナ」かな団扇の風によるめいて
人も去り波の音聞く夾竹桃
軍艦島保存夾竹桃笑ふ

草加 持永喜夫

観客の団扇の止まる大一番
断捨離や母の遺愛の絹団扇
夾竹桃街道今は田舎道
草伸びしままの庭先夾竹桃
プール事故責任を問ふ保護者づら

鈴木藻好

白濁の温泉ゆたか夾竹桃
店仕舞ひして十余年古団扇
大伯母をしのびて送る団扇風
代替り人出にわたり夾竹桃
歌声に合はせばたばたミニ団扇

鬼石 榊原聰子

夕立雲父母お迎への保育園
旅先の団扇作りに四苦八苦
澄みし空猿沢池の夾竹桃
霊園の白の清楚な夾竹桃
京の夜粋な絵柄の絹団扇

野村美子

曲家の煤けしかまど洪団扇
絵団扇を帯に挟んで屋台引く
こんちきちん連れ立ちて行く腰団扇
若者の夜の騒ぎや夾竹桃
破られし記録保持者の顔涼し

さいたま 湯浅 和

貴船茶屋土産にもらふ京団扇
洪団扇七輪煽りくさや焼く
洪団扇手早く煽ぐ舍利の艶
街道筋排ガス吸ふや夾竹桃
尾瀬沼や咲かせ保全よ水芭蕉

糸井しるく

言葉とぎれ忙しく使ふ古団扇
団扇はたばた開演を待つ野外席
縁側で団扇片手に将棋さす
名刹の楼より撒きし団扇受く
夏来る期限確かむる保存食

和歌山 川崎道子

山百合や亡父国鉄保安技師
団地十年子らも夾竹桃も伸び
団扇手に談笑吾子は十九歳
旋盤工場の塀咲き盛る夾竹桃
檳榔樹の団扇遥かなる九州

宮代 関谷多美子

みどりごにさはさはおくるうちはかな
病む父のほほ笑みうかぶうちはかな
背負ふ子の重さに耐ふや夾竹桃
日は西に子ら去る広場夾竹桃
見沼田の保存緑地の光る夏

さいたま 山岸久美子

打水や活気を保つ商店街
炎昼や進路の決まる保護者会
炎天や保冷剤首にパター打つ
赤児すやすや団扇ゆつくり右左
夾竹桃広島の地に花開く

東京 畑宮栄子

夾竹桃少年院に窓のあり
夾竹桃ぼんこつ車が引立つる
太文字の「優勝」とある古団扇
京団扇透かしより見る城下町
保育士の技が誘ふ昼寝かな

所沢 飯室夏江

夾竹桃砂埃浴び咲き続き
夾竹桃用水路にも影落し
客来ねば洪団扇もて用済し
背に赤児団扇であやす若き妻
保母さんも水着で児童見守りて

さいたま 田中章嘉

隧道出て眼にやさし夾竹桃
母の家今も大事に洪団扇
状差しを一人じめする洪団扇
縁側の団扇の風の生ぬるし
廃屋に一本残る夾竹桃

和歌山 西浦千枝子

遊園地貸し団扇へと駆けだせり
絵団扇の兎とパンダどちらにす
夾竹桃斑入りを花器にまとめけり
夏休み生徒の会費保留とす
両手で振る推しアイドルの大団扇

和歌山 葛城千世子

想ひ出を残して遠く夾竹桃
洪団扇持ちて踊るや過疎の村
戦なき未来を築け夾竹桃
顔みれば走り来る子や京団扇
故郷に残りし本や古団扇

和歌山 南條きわゑ

バス旅行夾竹桃のざわめける
夾竹桃共に遊びし友は今
保冷库のひつきり無しの炎天下
しんみりと保育園児の昼寝とき
祖母の手のゆつたり動く洪団扇

東京 松山清子

古団扇七輪の色止めけり
対局の顔のゆがめる古団扇
夾竹桃倒れしままの三輪車
夾竹桃ゆるき登りや牛の道
保護者会窓より参加蟬時雨

さいたま 山下ユリ子

京団扇やはらかき風感じをり
京団扇職人技も風に乗り
格別や我が町入りの古団扇
分離帯見守り癒やし夾竹桃
雲の峰三保の松原一段と

さいたま 小田三茅
(美智改め)

肝冷やし動かぬ団扇川下り
上り框に小さな座蒲団洪団扇
湯上りに団扇で隠すお爺ちゃん
夾竹桃しばし見詰めて嫁ぎ行く
保母さんの両手に余る水遊び

川村 治

言訳やたらと速く大団扇
人混みに追ふや背中の中洪団扇
飛び退る高速脇の夾竹桃
通勤路ああ夾竹桃だつたのか
梅雨明けて保安検査の人の波

東京 山中いちい

絵団扇や粋な絵柄は江戸模様
京団扇そろひの法被の背に一本
さんざ降り雨を保ちて苔茂る
夾竹桃真上に雲の湧くを見て
京団扇裾に風ある宵の頃

小山あつ子

兵児帯の背に団扇や踊りの輪
ゆるキャラの絵柄の団扇郷土愛
雲駆けて夾竹桃の白揺らぐ
一休みベンチの横の夾竹桃
夏レジャー三保松原の砂遊び

さいたま 武田重子

遠き日の母の優しや団扇風

さいたま 高原和子

吾子の顔見つつ団扇の風送る

絵団扇や時折覗く君の帯
手に団扇この難問の解けぬ夜

さいたま 石関六弦

縁側にひとりばたばた古団扇

雲の峰逆らふ質量保存の法則
体裁を保つ地軸や夏至の夜

古団扇ひたすら使ふ眠れぬ夜

絹団扇帯にはさみて祇園祭

和歌山 嶋田洋子

波団扇で蠅追つ払ふひいぢいぢ

四年待ちにぎる団扇や浦和をどり
団扇もてかざす仕草に視線あり
爽竹桃涙隠して咲き誇る
ほとばしる汗や厳しき保守点検

さいたま 川島夕峰

サングラス掛けてイケメン爽竹桃

保護猫に飼主ありて半夏生

保母さんも輪に加はりプール遊び

大阪 遠藤人美

ごはんよと母の呼ぶ声爽竹桃
虫叩く道具となりぬ京団扇
立合の一瞬止みぬ総団扇
保護犬や水遊びして家族となる

羽島秀子

升席の綺麗所の団扇かな

爽竹桃赤し賽の目の赤し

爽竹桃烈女に独り泣く夜かな

爽竹桃焼け野原にも赤き花
保育園幼児かけっこ夏帽子
縁台で団扇片手にひとときを

落合和枝

日盛りの保育園から関の声

子守して団扇の風の止まりをり

応援の熱気を煽る団扇かな

爽竹桃コンクリートを焦がすなり

団扇風若人同志ライブショー
爽竹桃この地で生を貫ぬくや
保守整備の握り拳の汗ばみぬ
上げ髪の後れ毛触るる白団扇

篠原さよ子

作品評

山本鬼之介

渴筆の一句の風姿古団扇 柚木治子

この歳になるまで書道の指導を受けたことがなく、会員諸氏に差し上げる短冊や色紙の揮毫の文字を自己流で通している筆者にとっては、まことに敷居の高い俳句であるが、能筆の作者の心意気が確りと詠まれている作品であると受け止め、今年の夏季競詠の巻頭に据えた次第である。

白団扇に揮毫された俳句であるが、見事に掠れた文字と俳句が一体となって独自の風情を構築している。数年の経時変化によって団扇にも貫禄が付き、一層風格のある文字になっていると思う。漢字が多く、渴筆・風姿と固い言葉が使われてはいるが、それが作者の気持を端的に表している。

マロニエの花咲く丘の保育園 矢作水尾

パリ・シャンゼリゼの街路樹として著名なマロニエの花を上五に冠した俳句である。ギリシヤ北部が原産地で、主としてヨーロッパ各地の公園の街路樹として存在感を示している

ようだが、日本でも首都や札幌市をはじめとして、地方都市で初夏にその優美な花を観ることができるといえる。むかし松島詩子が歌った「マロニエの並木路」のモデルとなった東京銀座のマロニエ通りの並木も身近なスポットの一つである。

さて、本句は、小高い丘に咲いているマロニエの花によって、読者に明るくモダンなイメージを与える。そして、究極は、育ち盛りの乳幼児を世話する保育園を表したことである。純真無垢な幼児が伸び伸びと育つ場所として、マロニエの花が実に効果的である。

横綱へ白真四角の大団扇 大橋廸代

大相撲本場所における一光景である。支度部屋の床几にどかんと座っている横綱へ、付人が巨大な真四角の白団扇でゆったりと風を送っている。大きな横綱に相応しい一般人が見たらびびくりする大団扇である。多分土俵溜りへ向かう前の横綱の姿で、沈黙考してこれからの取組の作戦を練っているのかと思う。今日も堂堂たる横綱相撲で立行司から勝名乗りを得ることであろう。

団扇風富嶽の波の彼方から 由良ゆら女

葛飾北斎の版画「富嶽三十六景」の中の「神奈川沖浪裏」を後ろ楯にして作句されたものと見た。遠景の富士山と手前

に描かれた巨大な浪は、人工物を寄せ付けない偉大な迫力を
持っている。特に今年の連日の猛暑で二十四時間欠かせない
エアコンや扇風機は、快適ではあっても精神的な安らぎが得
られないように思える。作者は、自然の風を心任せに送って
くれる団扇に、大浪の彼方に聳える富嶽から吹き下ろす風を
思い描いているのであろう。

日本の団扇の風に眠る 稚 梅澤輝翠

現今では、プラスチック製の宣伝用団扇が大勢を占めてい
るが、何と云っても竹籤に紙を貼った日本本来の団扇が生み
出す繊細な風には到底及ばない。作者は、子供の頃から生活
に密着させてきた竹籤団扇を今なお愛用しており、折に触れ
てこの絶品の風で我が身を癒している。「日本の団扇の風」
という最高の贈り物で赤子がすやすやと眠っている。

白団扇草の庵に墓ふたつ 檜鼻ことは

臈長けた尼僧が独りで住む草庵を心に描く俳句である。蚊
遣りを焚いている濡れ縁で、団扇をゆるりと使いながら月を
仰いでいる尼僧の姿は、千年も前のひとのようである。こじ
んまりとした庵の庭の片隅に、先代と先々代の尼僧が眠る墓
がある。古都の山裾に佇む草庵であろうか。

おほほの口を隠す女の京団扇 境 延昭

新型コロナウイルス感染防止のためのマスクの着用義務が
解除され、顔をさらす女性が多くなった。「おほほ」と上品
に笑う時、マスクが都合の良い小道具になっていたかも知れ
ないが、それが無ければ、扇子を使うか掌を添えるかの行動
を取る必要がある。料亭の離れ座敷でのひと時、小振りの
京団扇が、おほほの演出に効を奏した。

熔接の地を這ふ火花夾竹桃 石井喜恵

屋外での熔接作業であろうか。保護具を付けた職工が黙々
と作業を続けている。アーク熔接かガス熔接なのか、俳句か
らは読み取れないが、部外者にはとても近寄れない熔接火花
の恐怖感が漂っている。その日の暑さに熔接作業の熱気が加
わり、特異な環境をつくっている。火花の先にある夾竹桃が、
火花を宥めているかのようにある。

団扇持ち黒田清輝の絵を気取り 梅澤佐江

著名な画家の絵には、俳人における代表句のように、代表
的なモチーフがあるように思う。日本画家では、東山魁夷の
「緑色の風景」、平山郁夫の「駱駝」、上村松園の「舞扇」など。
掲句の画家・黒田清輝の作品の中では、やはり作品名「湖畔」

の箱根芦ノ湖の湖畔の岩に座して涼んでいるアップヘアの女性の絵が多くなりに識られており、モデルになった金子たねが手にする団扇が印象に残る。句の作者がモデルを真似て絵団扇を持つ姿もなかなか艶のあるものであろう。

八月の夾竹桃は魔女の舌 日高道を

盛夏の頃に鮮紅色の花を群がり咲かせる夾竹桃であるが、この花から受け取る印象は暑苦しさど熱情であろうか。ここで作者は「八月の」と夾竹桃を形容している。厳しい残暑が忍耐の限界にまで達し、夾竹桃が物の怪の化身のように思えてきたのであろうか。視覚で捉えていた夾竹桃を触覚で捉えた一瞬である。

白団扇置屋を飾る芸妓の名 鳥羽和風

その土地での流行っ子の芸妓の名を記した白団扇で、鼻筋や日頃お世話になつてお茶屋や料亭、歌舞音曲の師匠などに配られる。この置屋に在籍している芸妓の名の団扇が女将の居室に置かれていて、飾り団扇として粋な雰囲気をつくっている。作者の地元若狭小浜には「三丁町」という嘗ての茶屋街があり、紅殻格子や出格子の家、料亭が軒を連ねて落ち着いた雰囲気の中に往時の面影を遺している。三丁町にも、きつとこの句のような置屋が栄えていたのであろう。

風情ある木目の座卓京団扇 越田栄子

椅子の生活が主流になった現今において、和室用の座卓を使っている家庭は少なく、希少価値がある。この座卓は、敢えて濃い塗装を施さず、天然木の木目を生かしたものだと思う。おそらく近年製作されたものではなく、数代前から受け継がれてきた逸品かと想像する。時代を経てところどころに疵があるもののその貫禄は揺るぎない。この机に向かえば、さぞかし情趣に富んだ俳句が生まれることであらう。

面影は昔を留め背に団扇 青木鶴城

高倉健が主役の任侠映画を思わせる俳句である。悪徳な組相手の出入りで組長の代りに実刑を喰らい、十年ほどの刑期を終えて娑婆に出てきたむしよ帰りの男である。髪に少し白いものが混じり痩せてはいるが、筋肉質の体型と鋭い眼差しは昔のままである。元いたしまの祭に浴衣がけで現れ、関係者の眼を引いた。背に差し込んだ団扇が粋に決まっている。

絵団扇の美女ふと鬼女に見ゆる夜 大村節代

江戸浮世絵の美女が描かれた団扇であらうか。日常に使うには勿体ない物で、書棚の上に飾つてある。普段見慣れている光景なのだが、ある晩ふと見上げると、団扇の女が鋭い眼で自分を睨んでいるように思えてぞっとした。このところ猛

暑と多忙の日が続いたのが原因かも……。

勝機いま団扇の挙がる応援歌 五明 昇

恐らく野球試合の応援団席の光景であろう。皆が持っている大団扇には応援の文字が書かれてあり、ここぞという場面で応援団長の合図によって一堂が一斉に団扇を挙げるのである。かつて松本高校の応援団長を務めていた作者ならではの力作である。今年の全国高校野球選手権大会では、図らずも筆者の母校が一〇七年振りの優勝を成し遂げたので、本句が心の奥にまで染み渡った。

浮世絵の団扇をそつと額の上 石山かつ子

男が気持善げに午睡をしている。忍び足で近寄った女が、浮世絵の描かれた絵団扇を男の額にそつと載せた、という俳句である。この悪戯のその後のことを筆者なりに読み解くと、男は気付かず、に快い寝息を立てていて、男がいま夢の中で浮世絵の美形に膝枕をしてもらってご満悦なのだろうと、女が微笑みながらその様子を見ている、ということになる。

白団扇妻より淡きシャボンの香 正木萬蝶

文明開化の足音が聞こえてくるような「シャボン」の俳句である。石鹼というと実用本位の硬さを感じるが、シャボンは、その香りを嗅いでいるだけで満足するような響きを持つ

ている。筆者もぬるぬるした洗顔剤やボディソープが嫌いで、日常どちらもシャボンを使っている。

さて、この俳句を読み解くと、日頃シャボンを使っている夫婦が、団欒の時互いに団扇を用いていて、互いに団扇風が運ぶ風の香りを嗅いでいる様子が見えてくる。多分シャボンの銘柄の違いによるものであるが、夫の風の匂いが自分の方より淡いことを妻が認識している。ただそれだけのことなのだが、筆者には、その氣怠げな雰囲気が好き。

こんな木でも母の愛した夾竹桃 網野月を

夾竹桃に対する印象や思いは人それぞれ違いがあるだろうが、作者と亡き母とで、夾竹桃に対する思いにかなり差があることが伝わってくる。端的に言えば、母は好きだったが、作者は嫌いということであろう。「こんな木でも」にその感情が籠められているように思う。

炎熱の保身はふたつ無為と水 松井由紀子

今年梅雨の時期から暑さが続き、梅雨明けとともにその暑さが異常な状態となり、全国的に連日35℃を超える猛暑の夏が続いてそのまま厳しい残暑となっている。各地で連日沢山の熱中症患者が出て死者も多い。作者が達観した熱中症対策は、自然の中に身を置いて水分を充分補給することである。言われるまでもないことであるが、実際はなかなか難しい。

水琴窟

(水明集八月号鑑賞)

池田雅夫

初松魚食うて踏ん張れ五月病

飯田忠男

「五月病」は季語に挙げられそうだが、まだ認知されていないようだ。四月からの新生活の境遇に対応するために精神的な疲労の蓄積が五月ごろに表れるもので、現代社会を象徴している。滋養価の高い松魚、「初松魚」であればこそ。

捨つるもの増えゆく余生竹の秋

佐々木史女

「断捨離」などといって身辺の不要なものを捨てる話題が多い。一方、「終活」と称し、若いころの愛用品や今では使わなくなったものを整理するという。どちらも難儀なことである。「竹の秋」の取り合わせが絶妙で身につまされる。

星空は我のものなりソロキャンプ

飯室夏江

今、注目されている「ソロキャンプ」。コロナ禍で愛好者が増えている。キャンプファイヤーなどともに星の観測は欠かせない。「夏の大三角形」や手の届くような銀河を目的

当たりにして、「星は我のものなり」と感動している。

万緑や白く輝く天守閣

森下美智枝

夏の樹木の見渡す限りの緑に埋もれた城下。その中心には「白く輝く天守閣」が聳える。「万緑」の中の天守閣の荘厳さが目に浮かぶ。万緑と天守閣の白との色の対比が効果的。

子どもの日絵本の中へ小旅行

石浜悦子

メルヘンチックな表現に魅かれた。いかにも「子どもの日」にふさわしい。団らんの家庭で絵本を読み聞かせているのだろう。「絵本の中へ小旅行」が、その絵本の世界に没頭していることを示している。絵本の主人公になり切る子なのだ。

家中に響く足音子供の日

岡本祥子

家中を元気に走り回る子供。昔の家は広く、開け放った二部屋三部屋は恰好な遊び場であった。マンシヨンの家では走り回ることもない。しかし、しかし、郊外の静かな町には今も大きな家がある。楽しい「子供の日」であってほしい。

折紙の花添へ母の日のケーキ

関谷多美子

一般的な行事となった「母の日」。母への感謝の日として花を送ったり記念品を贈ったり、それぞれの気持ち伝える。「ケーキ」に添えた「折紙の花」。他にない手作りの独自の折

紙の花。もしかして「ケーキ」も手作りであるかも…

茗荷竹ひと雨ごとにのぶる朝

加藤ナヲ子

「茗荷竹」は晩春芽生えてくる。畑や庭の片隅にすつくと角のように若芽を伸ばす。一日で数センチ伸び、雨の日はなおさらである。「ひと雨ごとにのぶる」の措辞に、それを心待ちにしていることがはっきりと表れている。

ひとり旅風の匂ひの浅き夏

北出久美子

「浅き夏」という希代の季語に挑戦している。「浅き夏」の「ひとり旅」なので希望にあふれていて、ときめきを感じさせる。ひとり旅であるからこそ、「風の匂ひ」を敏感に察知できるので。浅き夏とした意図を充分に味わいたい。

官庁街上着片手の薄暑かな

綿貫ひさの

絵に描いたような「官庁街」の一場面である。「クールビズ」などといって少しは軽装になったものの、冷房完備のオフィスでは逆に寒いくらいのところもある。官庁街の新人には背広は欠かせない。より暑さを感じているにちがいない。

白藤や玉三郎の舞ふ姿

畑宮栄子

清楚で気品のある「白藤」。一方、歌舞伎界では女形としてその名を馳せる「阪東玉三郎」。華麗で艶やかなその二つを対比させて、誰もが納得する豪華な句に共感する。

リメイクや解き袷の洗ひ張り

武田重子

和服姿の女性を見かけることが少なくなってきた。昔、着ていた着物も箆の奥にねむったままという。思いきって、「リメイク」しようと「袷」を解き「洗ひ張り」にしているのだ。今では「張り板」すらも見かけなくなってしまった。

道行きは芍薬一枝帯に挿し

横山礼子

「道行き」にはいろんな意味がある。「道行文」で、旅の進捗と情景を表現する韻文。次に、能・狂言でのこと。歌舞伎などでのこと。そして、ある結果に至るまでの過程。最後に、襟元が角形の和装のコート。当嵌まるのはどれだろう。

夏の空呼ぶが如くに鳩の声

大島千恵

キジバトはヤマバトとも呼ばれ、「デデッポッポー」と啼く。早朝、家の近くの林で啼くことが多い。中七の「呼ぶが如くに」が誰を呼んでいるのかはつきりしない。「夏空を呼ぶが如くに」とすれば対象が具体的ですつきりする。

オクラ花凜と咲きたる山のう

駒谷行雄

淡黄色に中央が赤い花を咲かす「オクラ」。寒さに弱いので高い山ではないはず。夜から早朝に咲き昼には凋むので、実際に見て詠んだ句だろうかなどと鑑賞するのも一興だ。

大村節代 選

鼓
笛
集

野馬追の旗指物が風を切る
緋の母衣は若大将ぞ青田濃し
神旗手に駆け上がる坂人馬炎ゆ

本橋稀香

辻店の蕎麦屋水打つ深大寺
早朝のミサの響きや涼新た
観音の御手の先より秋はじめ

霜多光代

砕け散る波によるける秋の磯
さりげなく釣果窺ふ秋日傘
影二つ延ばす夕日や秋の浜

越田栄子

おほなむ
大神の森の昏さや冷素麵
腹掛けの若衆搔つ込む冷素麵
食道の位置自覚せり冷素麵

横山礼子

朝まだき歩道の草を引く媼
茗荷の子早く出でよと待つ狭庭
残暑なほ草木も水を欲しげなり

仲田利子

茄子の馬今年はうまく出来てをり
道迷ひ辻まで戻る終戦日
原寸の鯨生き生き夏空

綿貫ひさの

竺仙の浴衣ゆるりと洗ひ髪
無花果や白いワインに溶ける赤
幽けきや鳳仙花の実の爆ぜる音

山中いちい

夫は酔を吾は蜜掛く心太
夏空や牧に未来の画伯をり
人寄せる魔法あるかも夜店の灯

森 和子

日の出前たなびく雲のさやけしや
盆の月亡母の句集読み返す
さちかうの五弁の花片空を切る

後記朝香

核なき世求めつづけり広島忌
短パンで過す日つづく残暑かな
南瓜煮て昼の弁当仕上りぬ

榊原聰子

宅配は夫の好物市川の梨
つるりんと剥けし白桃病む夫に
サングラス掛けて二枚目老いし父

嶋田洋子

こぼれ萩読経の中の絵蠟燭
世の常の痛み隠して柚子の棘
秋澄むや人優しくて厳しくて

小山あつ子

虫鳴いて波は銀河に注がるる
蜘蛛の囀に蜘蛛を探せる独り笑み
じいさまと商店街の夏まつり

飯塚智恵子

夏休み一人店番させられて
駄菓子屋の店に泊まりて夏休み
店先の古びたベンチ夏終はる

川島夕峰

鼓笛集作品評

神旗手に駆け上がる坂人馬炎ゆ

本橋稀香

福島県相馬地方に伝わる野馬追は、神旗争奪に勝利した人馬が、本陣のある山に駆け上り、勝利宣言をする。汗塗れの人馬の荒い息遣いと勝利の喜びが伝わって来る。

辻店の蕎麦屋水打つ深大寺
早朝のミサの響きや涼新た
観音の御手の先より秋はじめ
霜多光代

三句を前に一瞬なやんだ。深大寺は天台宗の寺、ミサを行なうのはカトリック教会、そして観音様。しかし様々な宗教が混在する日本らしいとも言えよう。

影二つ延ばす夕日や秋の浜
越田栄子

夏から秋へ、しだいに日が短くなる中、あと少しと懸命に釣果を競う二人、いや釣り人と釣果を期待している人の二人でしょうか。いづれにしても、沈む夕日と二人連れ、絵になる景です。

鼓笛集巻頭（九月号）

私の好きな一句（自句自解）

清水桂子

アンニユイと呟いてみる花曇り

この句が今の私を水明に導いてくれた大切な句です。地元の同好会の句会がコロナで休みになる日が多くなり淋しく思っていた折に同好会から水明に入られた方から水明誌を半年だけでもと奨められたのが、きっかけでたまたま水明集に出したのが前記の句で、そのご縁をいただき今があります。

☆

☆

俳句

11月号 予告

10月25日発売

予価1,300円(本体1,182円)®

特別作品 西村和子・今瀬剛一・小林貴子

第69回

角川俳句賞 発表！

受賞作「小窓」50句……………

野崎海芋

受賞のことは／選考座談会／候補作品15篇

選考委員 仁平勝・対馬康子・小澤實・岸本尚毅

特集 俳句の若さ

俳句の若さについて／平成生まれの俳人の句
俳句甲子園の句／高齢者の若い句／伝統と若さ

特別企画
全国結社マップ Vol.2 北海道・東北・北関東

付録

季寄せを兼ねた
俳句手帖 冬

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

句集喝采

曲淵徹雄

◆松永浮堂「不動剣」

文學の森

著者略歴 昭和三十一年埼玉県生。昭和五十二年「浮野」創刊人会。昭和五十五年浮野賞。昭和六十二年谷川賞、浮野大賞。平成十四年浮野大賞。平成十五年埼玉文芸賞準賞。平成十七年俳人協会新人賞、埼玉文芸賞。俳人協会会員。

著者の第六句集として、平成二十九年から令和五年までの三一八句を収載。句集名は、幼い頃より親しんできた不動ヶ岡不動尊總願寺の境内にある、俱利伽羅不動剣を見つめて詠んだ「一天に灼くる一剣とこしなへ」による。

春の雪水の秘色を打ち止まず
サングラス外す明眸きらめかせ
空蟬のなほ登らむとする構へ
影先に落ちてゆくなり桐一葉
冬萌は川波寄するところより
いずれも著者があとがきに記す観照一気の俳句。

春めきてものみなゑくほ持つごとく
虹すつと消えてしづくをこぼしけり
映る日も食べてしまひぬさくらんほ
紐一つ引けば外るる水着かな
磔刑をやうやく解かれ捨案山子

第一句、第二句、詩情を含めて詠んだ句。第三句、第五句、俳味、とほけた味もある句。他に、「大寒や怒濤は永久に岩を打つ」などスケールの大きな句がある。

◆江崎紀和子「花の幹」

本阿弥書店

著者略歴 昭和二十五年愛媛県生。平成二年阪本謙二に師事。平成五年「櫟」創刊入会。平成九年櫟賞受賞。平成十六年「櫟」編集長。平成二十六年「櫟」主宰継承。俳人協会評議員。俳人協会愛媛県支部長。

著者の第三句集。平成二十六年から令和四年秋までの句を収載。句集名の由縁は、「櫟」創刊主宰の跡を継いだ心境に託して、著者あとがきに記されている。

遍路装束一人づつ違ふ白
滴りの次のひかりを膨らます
爽籟や水にしづかな水の影
なべづるのつと見廻せる野性の眼
写生を基本に詠う著者の姿勢が明白である。
腕は赤銅念仏の踊り衆
地芝居の指のさきまで白く塗り
雪催ひの谷につがへる甲矢乙矢
花冷は太宰生家の板間より
うりずんや島のあばあの働く手

第一句、第三句は愛媛の伝統行事を詠った句。第四句、第五句は旅を詠まれた句。対象をあたたく見守っている。日頃の生活を詠んだ句に「しろみづを静かに流し螢の夜」「更衣の虹のち一つを繰り返し」。他に「ひといろはたましひの色秋の虹」、「淋しらを彼方における玉子酒」など、著者あとがきにある虚の世界を探ったと伺われる句がある。

網野月を選

山紫集

生え揃ふ乳歯の白や羽抜鳥

河野はるみ

ゆつたりと羽広げたり羽抜鳥
覚えなき罪させられて羽抜鶏
羽抜鳥口内炎に触れ痛む
羽抜鶏上目遣ひに水を飲む

樋口元美
池田珪子
吉川拓真
保坂翔太

もしもして始まるメール羽抜鳥

野口和子

ひき連るる影の尖り羽抜鳥

以上特選

羽抜鳥暖簾を下ろす菓子本舗

青木鶴城

禿頭の夫のダンデーー羽抜鳥

正木萬蝶

羽抜鳥平家の里は静かなり

笹本啓子

君はいいなあ再生可能さ羽抜鶏
鶏冠とさか立てからゐばりする羽抜鶏

町野広子
松井由紀子

かわいいとしゃべるインコや羽抜鳥

福田千春

雄鳥の威厳は何処へ羽抜鶏

松宮保人

かたくなに乾かぬタオル羽抜鳥

石田慶子

一心に境内歩く羽抜鳥

丸屋詠子

強面の自恃崩れゆく羽抜鶏

丸山マスマ

毅然たるポーズ崩さぬ羽抜鳥

秋谷風舎

羽抜鳥藪より確とメッセージ

宮崎チアキ

肩書も威厳も捨てて羽抜鳥

新 曆文

砂浴びの砂は熱かる羽抜鶏

本橋稀香

何食はぬ顔して藪へ羽抜鳥

阿部幸代

門の裏門閉ぢて羽抜鳥

森川義子

空をとぶ夢捨てきれず羽抜鳥

荒井俱子

古井戸に顔を出したる羽抜鳥

森下美智枝

気怠さの時を啄む羽抜鶏

飯田忠男

砂浴びの心もとなき羽抜鶏

森 美枝子

希代なる正直者や羽抜鶏

池田雅夫

羽抜鳥今宵は何を夢みるか

山下ユリ子

怯ゆる目威嚇する目も羽抜鳥

石川理恵

また一つ時過ぎ行きて羽抜鳥

山中いちい

参道を駈けぬけてゆく羽抜鳥

井上燈女

羽抜鶏羽搔き寄せる係の子

湯浅 和

眼光は鋭く光り羽抜鳥

井上玲子

庭先をモンローウオーク羽抜鶏

横山君夫

再生や鏡見せたや羽抜鶏

上戸千津子

羽抜鶏五デシベルほど力抜け

横山礼子

羽抜鳥肩を怒せ国家論

内田恵子

羽抜鳥付き纏はれて若き僧

綿引まりこ

羽抜鳥我が身気付かず追ひまはし

梅澤輝翠

目ぢからは團十郎や羽抜鳥	梅澤佐江	腰痛の夫に再び羽抜鳥	榊原聰子
水覗き泣き笑ひして羽抜鳥	大場順子	羽抜鴨利根の浅瀬のささら波	佐々木史女
今一つ生気の足りぬ羽抜鳥	岡田宣子	朝を告ぐひしめく小屋の羽抜鳥	篠崎紀子
羽抜鶏露地をさ迷ひ啄みて	加藤でん治	目の前を意気揚揚と羽抜鶏	篠原さよ子
羽抜鳥今は待つ時がまん時	川島夕峰	羽抜鳥泣くも笑ふも淋しけり	渋谷さいち
鳴き声は変はらずきれい羽抜鳥	熊倉千重子	悩むこと無いはと私羽抜鳥	清水桂子
羽抜鶏卵の味の変はるらむ	小駒さち子	新しき鶏舎穿る羽抜鶏	下川光子
羽抜鳥前歯抜けたる児の笑顔	越田栄子	羽抜鳥ふり返る眼の烟烟と	霜多光代
羽抜鳥逃げる姿の我に似し	後藤綾子	割り切つて長きの休み羽抜鳥	菅原卓郎
羽抜鶏啼叩けば飛び上がり	小林京子	こんな時ヴィッグつけたし羽抜鳥	菅原真理
羽抜鶏雄々しく鳴けどなほ貧相	小山あつ子	明日がある目だけ強気な羽抜鳥	杉浦千祐
帰りなんいざ故郷へ羽抜鳥	近藤徹平	羽抜鳥累代続く鏡き眼	鈴木藻好

すつぴんの羽抜鳥あつけらかんと

鈴木玲子

狭小屋に子らの声援羽抜鶏

西幅公子

羽抜鳥誇り忘れずコケコッコー

関谷多美子

羽抜鳥シャッター街の歯脱けの灯

野田静香

羽抜鳥口止め料に卵産み

瀬戸雄二郎

ぼんやりと見窄らしいよ羽抜鳥

野村美子

羽抜鶏水炊きするに不味気なり

染谷風子

羽抜鶏気力の抜けし己かな

畑宮栄子

哀れむや空威張りする羽抜鶏

反町 修

闘魂も威厳も失せし羽抜軍鶏

原田秀子

鶏冠の色合ひ失せし羽抜鳥

高島寛治

我もまた雌伏の時よ羽抜鳥

日高道を

止り木の上段きらふ羽抜鳥

高橋満耶子

普段着のつまる箆笥や羽抜鳥

檜鼻ことは

道の端駆けるスリムな羽抜鳥

武田重子

羽抜鳥恐怖に満ちた日数かな

田中章嘉

良き事も時には休め羽抜鳥

飛永 鼓

☆

☆

羽抜鳥来世は美人で飛び立つぞ

南條さわゑ

餌をまけば真つ先に来る羽抜鳥

西浦千枝子

山紫集作品評

網野月を

が出来る。通常メールは、「もしもし」の書き出しでメールを作成することは少ないだろう。メールにはあまり堅苦しい表現を用いないものだ。もっとも人によってなのである。ラインやメッセージ機能なら、より簡便なそして親しげな表現が一般的かと思う。それが「もしもしで始まる」というのだから、この方はメール初心者か、普段メールを使い慣れない方なのではあるまいか。季語「羽抜鳥」の晩夏から初秋に生え揃うだろう。新羽のプレステージを予感させていて、本意と初心の心持が立体的に交又しているように感じる。

羽抜鳥暖簾を下ろす菓子本舗 青木鶴城

季語「羽抜鳥」と座五の「菓子本舗」の関係性において同時間性も同空間性も感じ取ることができない。ということは季語の本意、本情と中七座五の句意のいわゆる二物衝撃として解読することしかないであろう。

羽抜けのネガティブな状態と菓子本舗の盤石さという真逆な価値の緊張感、羽の生え変わる移行期という時間と菓子本舗の伝統の時間の質感の相違、「羽抜鳥」と「菓子本舗」の根本的な本質の質的なおよび量的な差異、等々の二物衝撃として解析することも出来るだろう。その部分は読者に任されているのだ。筆者は「羽抜鳥」の生（個体の維持）への固執、「菓子本舗」の伝統（種の保存）への拘りという、存在するものの両義性の相対のように解釈した。

読み手にはまた別に創意の起点があるのかも知れないが。

羽抜鳥平家の里は静かなり 笹本啓子

脈々と継承され続けた平家の里とそこに飼われている「羽

生え揃ふ乳齒の白や羽抜鳥 河野はるみ

季語「羽抜鳥」と上五中七の句意のいわゆる取合せ句である。とは言え、「生え揃ふ」と「羽抜」の正反対の価値のベクトルを取合せていることになる。「羽抜」は齒抜けに通じるのであろうか。そこまで考えると語呂合になってしまふのだが。むろん上五中七の句意は目出度い事柄であり、「白」という真っ新たな事柄を意味する語彙が表現に幅を持たせていて、祝の気分を助長している。季語「羽抜鳥」もまたやがて新しい羽が生え揃うことに繋がっていると考えると「羽抜鳥」の本情の一つでもある滑稽という意味を超えて、新生、再生の意味を導き出して、季語の扱いに新味を覚えるのである。

もしもしで始まるメール羽抜鳥 野口和子

この句も前句同様に新生の意味を汲み取れるのではないだろうか。季語と上五中七の句意の僅かな交又を読み取ること

拔鳥」の時過の経緯を見事に組み合わせている。「羽拔鳥」の僅少な動きに比して尚、「平家の里」は平穩なのであり、里への敬慕が含まれているように感じられる。

かわいいしやべるインコや羽拔鳥 福田千春

「かわいい」は習った言葉であり、来客への世辞であり、今の時は自分自身への愛嬌なのである。

かたくなに乾かぬタオル羽拔鳥 石田慶子

「タオル」に意志は無いのだが、この作者は常にアミニズムの中にあつて、万物に心を持たせようとするところがあるようだ。「羽拔鶏」の季語によつて成功している。

ゆつたりと羽広げたり羽拔鳥 樋口元美

作者の慧眼がものを言っている。「ゆつたりと羽ひろげ」る一瞬を見逃さない。

覚えなき罪きせられて羽拔鶏 池田珪子

素直に解せば、鶏の羽拔けの有り様が天罰のようにも読めるのだが、上五中七は人に起こった事件のようにも読める。素直に読むことにしましょう。

羽拔鳥口内炎に触れ痛む 吉川拓真

このような取合せ句を鑑賞する場合、まずは季語と句意の關係性を探り出そうとする。真逆の意味合いならばその二者の關係性の緊張感の、言つてみれば凄みのようなものを感じ取ろうとする。そこから鑑賞を始める訳である。關係性の存在が感じられる掲句のような場合には、何処かに共通項が無

いだらうかと、探すことになる。平面的な把握ならば、直線は平行線か、どこかで交わるかのどちらかであるが、三次元的な把握を要する場合は、鑑賞者の立ち位置を移動し乍ら、両直線が交わる立ち位置を探すところから始めなければならぬ。直線ならば、なのであるが。

「痛む」のは作者自身であらう。あくまでも筆者の場合だが、口内炎は治りかけの段階が最も痛さを感じているようである。見た目にも患部の白さが増して炎症の末期の段階を示している。今後に「痛む」ことの峠を越えて治癒に向かうのであるが、中にはそのような考えは浮かばずに「口内炎」の痛みが気になって仕方がないものである。「羽拔鳥」もまた生え変わる過程にあつて同様の苦痛を感じているのではないだろうか。肉体的な苦痛なのか、精神的な苦痛なのかは知る由もないが。

羽拔鶏上目遣ひに水を飲む 保坂翔太

一瞬の鶏の表情というか、首の角度というか鶏の様子を見逃がさない作者の観察眼と表現の飛躍に敬服する。この鶏は何時ものように「水を飲」んでいるのだ。鶏にとつては格別に何時もと異なる態度をしている訳ではないのだ。ただ、作者がそう見て捉えたということである。その条件を充足するために季語「羽拔鶏」という主体が機能しているのだ。

加えて句の表現の中に飛躍がある。多分、この鶏は首を傾げたのである。一般の鶏の首は飽かずによく動いている。その首の動きを「上目遣ひ」に置き替えてしまった。首の動きでは「水を飲む」動作に直結してしまふからだ。観察と表現の飛躍によつてこの鶏の個々の人格ならぬ鳥格を表出している。

『俳句四季』

九月号

星野和葉

作品8句

日高道を



3年間我慢してきた年1度の旅行、やっと行く事が出来た。旅館だけは確保し「Suica」を使つての行き当たりばったり。宿の夕食を堪能し後は駄弁るだけ。帰路は思い掛けずSLに乗り合わせ、汽笛の音に感激し心の洗濯をした。

粹な送り主

黒嵬にくぐり戸の威新松子
秋蟬や心残りか鳴き募る
胸中に刺さるかな彼の時も
加筆ある古き原稿つくつくし
ちちろ虫汝も独りか宵つぱり
帳尻は合はぬままなり新酒かな
和綴ぢ本褪せてほろほろ白式部
見透かさる心の揺らぎ桐一葉
竜胆一輪活けて尊師を敬ひぬ
贈られし新米粹な送り主

人には人の

はんざきや人には人の進化論
だつこされおんぶされても石鹼玉
八月の前頭葉は言葉の海
進化とは退化の兆し蜃気楼
逃げ水に溺死してゐる我が未来
早星其は人生の過客かな
使用済の肉体白し麦の秋
ライオンの声ぞ悲しき夜の秋

水明例会

第一例会（浦和）

境延昭
茂木和子

原爆忌国旗はためく巡視船
化野や夕日重たき夏の果
投げ入れの壺に野の花原爆忌
約束の時刻に来ぬ人原爆忌
国憂ふ大化以来の極暑かな
向日葵も化学反応して生さる
原爆忌背に陽の痛き墓参り

喜恵
節代
舍人
京子
拓真
由紀子
以上特選
京子
チアキ
和葉
稀香
マスマ
順子
節代

妻の守る糠味噌床や原爆忌
広島忌「幽霊」帰る美術館
涼風や誰のためでもなき化粧
霸王には届かぬ祈り原爆忌
鶴いくつ折らば終ふるや原爆忌
化物は人間だらう原爆忌
蚊帳そつとくぐるほんのり薄化粧
写真撮れば影が入り込む原爆忌
尾が紫の化身の獣や女郎花

延昭
卓郎
由紀子
徹平
はるみ
拓真
千祐
舍人
和子

夫米寿帝国ホテルの夏料理
枝豆やいつもの席の縄暖簾
未完なる知的生命原爆忌
干からびた蚯蚓天寿を全うす
山深く阿波遍路道蝉時雨
蟬時雨吾が魂の抜かれゆく
風流れ静寂漂ふ秋の夜
降る雨や息吹き返す夏の夜
戦争の話に飽いてかき氷
新涼や医者諫むる腹回り

みどり
鶴城
以上特選
峰雄
りこ
いちい
竺仙
敏江
士史
みどり
鶴城

第二例会（東京）

山中みどり
青木鶴城

義母住みしマンション見上げ墓参り
浮き立ちて蟬の二拍子阿波の街
吾妻橋の風に潜むや秋隣
また空き地三軒分の晩夏かな
熱風呂と氷枕や夏の夢
新涼や慣れし目薬染みにけり

りこ
いちい
峰雄
敏江
士史
竺仙

第三例会（東京）

五明
曲淵徹雄

御用邸続きの浜も土用波
赤人の歌詠みし浜土用波
雲の峰ゴジラはイヌに呑み込まれ
サーファアの空より下り来土用波

昇報
康世
理恵
順子



面影を寄せては攫ふ土用波
帰り船を弄ぶごと土用波
山一つ越えて秋めく甲斐の里
母校先づ一勝の夜の生ビール

千 祐
徹 雄
雅 夫
昇

使はれてをらぬ灯台土用波
風見鶏動かず土用波高し
少年が太宰を読んでゐる晩夏

以上特選
理 恵
順 子
雅 夫

ひまはりや昭和の御代の八頭身
日の本にハイビスカスの似合ふ日日
サバイバルゲームの如き日日海暑
コンビニの中の砂掃き土用波

徹 雄
千 祐
萬 蝶
喜 久
康 世
昇

お囃子の手拍子響く夏座敷
引き際は男の意気地土用波

星 歩
昇

第四例会 (浦和)

境 延昭 報
石井 喜恵

夏芝居台詞回しのあどけなさ
荒事も女形も熟す夏芝居
色悪の睨みにぞくく夏芝居
大海月宇宙遊泳さながらに
夏芝居鬢付匂ふ棧敷席
馬の脚やたらと太き夏芝居
怪談も笑ひの漏るる夏芝居
海月寄す波頭を砕く隠れ岩

でん治
マスマ
由紀子
翔 太
延 昭
寛 治
曆 文
喜 恵
以上特選

以上特選

第五例会 (浦和)

梅澤 佐江 報
河野はるみ

あの人と来し境内や夏芝居
吾が町に人気役者の夏芝居
クルーズ船迎へ海月のフラダンス
街の火を恋うて海月が浮く波止場
夏芝居粋な台詞も国訛り
波止場ゆく草履カラフル水母浮く
白粉香楽屋にこもる夏芝居
雨宿り水族館に海月かな
暗転や美女が鬼女へと夏芝居
桐一葉身に寄る月日しみじみと
遠き日の父と縁台流れ星
故郷の縁台恋し流れ星
音残り一葉の秋を知りにけり
決断に揺るる眼へ一葉落つ
流れ星離れ小島の神神へ
舞扇ひるがへる如一葉落つ
桐一葉更なる静寂深めたり

翔 太
太 太
修
延 昭
寛 治
恵 子
曆 文
光 子
でん治
喜 恵
玲 子
義 子
水 尾
千 祐
はるみ
佐 江
以上特選
はるみ
宣 子
玲 子
義 子

若松例会 (京橋)

正木 萬蝶 報
石田 慶子

送信す想ひは流星追ひ越しぬ
伊豆山頂へ落ちてゆくかに流れ星
矢継早に流れ星飛ぶ八ヶ岳
流星は天の言伝て病む地球
日曝しのひとりの漢百日紅
伐らねばならぬ母の手塩のさるすべり
野馬追の陣頭駆くる黒茸毛
团扇風首の黒子の垣間見ゆ
黒服の差し出す傘や驟雨来る
生き下手の父老木の百日紅
夜の風に散るも今朝咲く百日紅
昼顔の白さを拒む黒茸毛
あの昼の太陽黒し敗戦日
さるすべり杖たてかけて拭く眼鏡
盆の月微笑む遺影の泣き黒子
女子寮は男子禁制さるすべり
夏休み課題の図書は「赤と黒」
真実はいつも意の中百日紅
夜の秋滑つて光る黒茶碗
百日紅玉砂利涸ぶ庫裡の傍
炎天下液化してゆく前頭葉
玩具みな鹽に沈み夏ゆふべ

千 祐
水 尾
美 佐 尾
佐 江
月 を
マスマ
稀 香
鶴 城
慶 子
京 子
月 を
以上特選
月 を
ひろこ
慶 子
佐 江
千 祐
星 歩
鶴 城
千 春
京 子
マスマ
稀 香

すべり台の順番待つ子百日記
風待ちの防人の恋百日記

はるみ
萬蝶

昔話あれこれ31

古事記の閉幕

父(市辺のおしほのおおきみ)復讐を遂げた兄弟の物語を最後に『古事記』は皇統譜を記すだけになる。

武烈天皇(25代)

御子は無し。そのため皇位を継ぐべき王は居ない。
群臣は応神天皇の五世の子孫の袁本杵命を近江の国から探し出して皇位に着けた。

継体天皇(袁本杵の命)(26代)

の御子は十九名である。(男七名 女十二名)

この帝の時代に筑紫の君石井が反乱を起し、物部の荒甲の大連、大伴の連金村を派遣して征伐した。

安閑天皇(27代)

継体天皇の御子・広国押建金日命が皇位を継いだ。
御子は無かった。

宣化天皇(28代)

安閑天皇の弟建小広国押楯の命が、皇位を継いだ。御子は五名であった。

欽明天皇(29代)

継体天皇の御子・天国押波流岐広庭命が皇位を継いだ。
この帝の御子は二十五名である。

敏達天皇(30代)

欽明天皇の御子。沼名倉太玉敷の命が皇位を継いだ。この帝の御子は十七名である。

用明天皇(31代)

敏達天皇の弟の橘の豊日の王が皇位を継いだ。この帝の御子は七名。その中の一人が上の宮の厩戸の豊聡耳の命(聖徳太子)。天皇の治世は3年。

崇峻天皇(32代)

この帝の治世は4年。

推古天皇(33代)

敏達天皇の妹の豊御食炊屋比売の命が皇位を継いだ。治世は37年である。

(おわり)

*『古事記』が推古天皇で幕を閉じたのは安萬侶の意図が「古代」を語ることにあったからである。(『新潮日本古典集成・古事記』)

*政治経済の現実が夢や物語や伝承、歌物語の生まれる余地をなくしてしまっ

た。

(『田辺聖子の古事記』)
丸山マスキ

各地句会



闇を撫で闇を叩いて踊りけり
湯の町の宿下駄ゆるき踊の輪
焦げ臭き地球忘るる星月夜
庭園の裸婦像光る星月夜
バス待ちの人にも届く踊唄
円卓の会 (浦和)

若鮎句会 (浦和)

野の空を包むがごとく赤蜻蛉
新秋や新刊本のプロローグ
小籠包とび出したスーパ秋祭
丸き背を伸ばして子守り女郎花
早暁の窓に風入る秋初め
白雲に届かぬが好し女郎花
山懐の小さきアトリエ女郎花
無花果や包みを切らば肉明き
女郎花あれは正夢だつたのか
御巢鷹の尾根に合掌をみなへし
柿の木塾 (浦和)
校長も生徒に真似て踊り出し
阿亀の面取れば男よ盆をどり
ふる里へ思ひのつきぬ星月夜
峰々をつなぐ铁塔星月夜

紀子 秀子 順子 さなえ 芳春 拓真 稀香 月を 鶴城 喜夫 章嘉 和葉 俊晴 かつ子

風呂敷に清酒一本盆見舞
診療所西日遮る青ふくべ
秋の日やシャトルブルー色極む
草の香をいろにするなら何しよくか
秋めくや余白の多き水彩画
べらべらと同時通訳秋暑し
葡萄棚祈るが如く手を伸ばす
残暑かな鹿爪らしきご挨拶
一念の古民家住まひ青ふくべ
ミモザの会 (横浜)
火を囲むフォークダンスや避暑地の夜
雨粒の光る蜘蛛の巣くつきりと
蜘蛛の囲をキラリ纏つて古家かな
星月夜今度の火曜会いたいね
送り盆火を焚く母の小さき背
蜘蛛の子は亡者の塚に群がりぬ
立ちはだかるは門扉の前の女郎蜘蛛
蜘蛛の囲を払ひ進むや少年団

水尾 昇 節代 恵子 和子 道 輝翠 拓真 静香 翔太 月を 鶴城 慶子 玲子 亞弥子 由美子 詠子 萬蝶 史代 千春

たかな俳句会 (川口)
なすことのなき八月の万華鏡
姿見にパパと書く兎や蟬しぐれ
ゆくりなく合せ鏡に水着跡
羅を着こなす反り身大鏡
入江へと続く棚田や赤まんま
金閣の姿涼しき水鏡
目力や絵師入魂の立佞武多
神戸大池句会 (神戸)
荒れ庭の散水草にやる如し
夏深きひしほの町の赤ボスト
蟬殻の九つ十や午前四時
卑月の会 (浦和)
新豆腐提げて平家の隠れ里
古里の天穹獅子座流星群
鈴虫を遠くに聴きて睡魔かな
さやけしや座上の客の江戸小紋
新豆腐今朝の湯けむり威勢良く
満月の星座ロマンが澄み渡る
風を呼ぶ夕餉の窓や新豆腐
新豆腐醜の兄の三回忌
役柄は「お嬢吉三」よ星涼し
盆の月我も一人になりにけり

のり子 福美 小麦 小義 鶴城 水尾 静香 千津子 玲子 早苗 山菜 更穂 光代 珪子 順子 紀子 静香 曆文 美佐尾 さいち

和歌山水明句会 (和歌山)

遅れくる音の愉しき遠花火

法師蟬息ながながとオペラ歌手

細りゆく母のかひなや盆用意

曝板を掛けの水器とし秋桜

合戦の武将姿に水鉄砲

クレイン伸ぶビルの谷間の夏空へ

子鴉の甘鳴さきこゆ鎮守の杜

女の嘘は秋の金魚のあぶくほど

新樹の会 (浦和)

盆の月光る線路の開閉機

網を持つ少年の背に赤蜻蛉

水鏡杭に止まれる秋茜

貼り紙に閉店の文字そぞろ寒

山寺の夕暮れ早し赤蜻蛉

初更には閉まる玄関穴まどひ

止め処なき多忙の日日や赤蜻蛉

俳句の手ほどき (岩槻)

危絵のあぶなきあたり雲母虫

妹初盆西東京市東町

吾がしるべ青春の書は紙魚の糧

東南北勢ひづく雀夏の夜

東北を奮ひ立たせし佞武多かな

衣魚払ふ祖父の襟章星三つ
道東の花咲蟹の蒸し加減
紙魚ひとつ父の形見の日章旗

東雲の空を浮かばせ夏期の
紙魚あとの滲む版画や少年期

初恋のアルバムの顔紙魚齧る
紙魚食むや書架に坐す広辞苑

平家巻物その偽物に雲母虫
コクーンシテイカルチャー俳句教室 (さいたま新都心)

襟元の汗を拭うて洩らす息
赤子の涙拭ふ幼子汗光る

キャンブの灯マッチ擦れる子擦れない子
校庭を一緒に駈ける玉の汗

原爆忌「エノラ・ゲイ」は母の名と
キャンブの灯消せば太古の闇迫る

山 茶 花 (浦和)

鳳仙花三猿刻む神厩舎
新涼やドレスは透けてゆれてをり

秋涼し友の叙勲が新聞に
野ばらの会 (浦和)

呵呵大笑完熟ゴーヤ一赤き口
八月の澄み渡る空鳩の翔ぶ

義子

水尾

佐江

倭子

延昭

八月や平和宣言声高に
学窓にゴーヤのカーテン子らの歌

八月や夜に弾ける感喜の声
水明濁くし句会 (大阪)

お供への葛餅ひとつ鈴を三つ
枕辺の団扇を払ふ夢淡し

秋暑しやたら機嫌のよき空よ
迫りきてしばしとどまる大花火

芙蓉句会 (浦和)

大噴水上野の森は深閑と
噴水と一緒に子供ら跳びはねり

噴水を作る虹の子はかなくて
夏祭り父に諭され参加する

蝌蚪の会 (浦和)

敵失を惜しむナインや秋高し
食欲の秋私の敵は体重計

父と子の鯊日和なり竿の揺る
焼き鯊を荷おひ鼻頂へ売り歩く

竿仕掛刻ところよし鯊日和
岸壁で鯊釣る翁恵比須顔

敵娼は女形の華や村歌舞伎
水際の匍匐前進鯊日和

気紛れな馬手に弓手に稲光

秀子

茂子

栄子

夏江

みき子

智恵子

人美

洋子

ゆら女

道子

税子

美子

礼子

ひさの

元美

しるく

風舎

さち子

月を

鶴城

宣子

若 枝 句 会 (浦和)

秋めくや風のしじまに太鼓の音
窓をあけ蝸の声かよふ居間
秋めきて砂の足跡消ゆる浜
かなかなやカードで払ふおままごと
秋めきて隣家の笑ひよく通る
蝸やこゑに焦りし速き日々
凝らす目に揺るる梵鐘秋めきぬ

鶴川山百合句会 (町田)

恋に少し毒が葉味や夾竹桃
夾竹桃こんな奴でも夫だから
小走りの下駄は姉さか夜の秋
母の命日白夾竹桃咲けり
夾竹桃日々を元気に子孝行
コンクリートの塀から覗く夾竹桃
喜びがあふれ山百合大輪に
絵団扇や夢二のをんなゆらゆらと
七十七本の向日葵を貴女に
喜寿のひと凜とまとひし蟬ごろも
歌にのせあふるる郷愁喜寿の夏

蘭 の 会 (浦和)

晩夏なり夫にも開かぬ瓶の蓋
茄子洗ふ昭和を生きし井戸の水

美佐子
泰生
泰子
貞代
みどり
敏江
徹雄

雄二郎
月を
喜久
史代
広子
由美子
千春
萬蝶
理恵
美千子
玲子
小 麦
ま り こ

列柱の力なき影晩夏かな
桶に浮く海より深き茄子の紺
初茄子や糟糠の妻髪染むる
念願の徹夜踊りや鼻緒され
茄子もぐ自分を満たすのは自分
屋形船晩夏の汐の飛沫かな
少年の内緒ばなしや夏惜しむ
晩夏光乾いた風や雲高暮し
水茄子の刺身を食らふ島暮し
晩夏かな霞み始める白内障
晩夏光乙女の像の豊かなり
きざきサークル (浦和)

門ごとに今日の高さの花木槿
秋簾藍染匂ふ城下町
手渡しで受くる郵便むくげ垣
木槿垣たどりに巡る城下町
駄菓子屋に子等の声あり秋簾
秋簾ロック漏れくる京の路地
白木槿に姉の面影鎮魂歌
底紅や表札にある裏千家
若狭水明会 (若狭)

青柿や只今通過岐早羽鳥
青柿やトタンの屋根に音残し
青柿や残し置く物捨つるもの

珪子
悦子
風子
夕峰
智子
風舎
さや子
節子
月子
鶴城
京子

昇
光子
俱子
和枝
啓子
健司
和子
初花
郁子

青柿や若き力士の初土俵
滴りてやがて大河となりけり
滴りの洞窟にある霊気かな
滴りや昼なほ暗き奥の院
師の言葉囁くやうに滴りて
生傷の絶えぬ選手や柿青し
尻に砂ビーチバレーの日焼の娘
玉葱を吊るす母の背低くなり
青葉の会 (浦和)
雑草さへも生き延びたきや秋早
朝まだき水やり励む秋早
住吉のレトロな街の秋の夕
秋早脚の伸びたる浮棧橋
潮の香や島に定住したき秋
台風や住居浸水おきみやげ
昔は村とおぼしき湖底秋早
秋早壇輪の顔が渴望す

あゆみの会 (浦和)
故郷は民話の里や天の川
夏祭り母と抱き合ふはぐれし子
夏の夕父の背流す三歳児
先を行く歩荷逞し夏の山
いつ見ても心わくわく夏の山
放牧は麓よりも山の上

八重子
登美江
保人
ことは
祥子
寛久
友夏
真理
美智枝
美子
啓子
公子
洋子
和子
輝翠
啓子
重子
和子
俱子
山遊
藻好

櫻の会 (浦和)

爪染めに使ひし頃や鳳仙花
乙女等の弾ける笑顔鳳仙花
花の命はじけ飛び散る鳳仙花
復興支援秋刀魚無料に長き列
拭き終へし仏壇に上ぐ初秋刀魚
秋刀魚焼く見守る猫にお裾分け
口尖りいなせな貌の秋刀魚買ふ

雛の会 (浦和)

迂回路の太き矢印鬼やんま
立秋や豆腐の布目水に透く
つゆくさのやうに咲きたし吾もまた
矢継早の子の質問や秋立ちぬ
豆腐屋の木型干したる今朝の秋
珈琲の豆挽く香り今朝の秋

珊瑚の会 (浦和)

五時に鳴る閉門チャイム秋燕
去ぬ燕素寒貧の駅舎の巢
秋燕や寺の門扉の開かぬまま
切株の年輪かぞへ秋はじめ
荒磯にからむ藻屑や秋つばめ
出航の水尾すれすれに去ぬ燕
新秋や丹念に読む書評欄

裕 誌
克 之
富 子
文 子
あつ子
朋 子
千重子
喜 恵
燈 女
公 子
チアキ
輝 翠
佐 江
広 子
和 子
和 葉
かつ子
喜 恵
マスミ
水 尾

新秋が山下りて来る佐久平
妙義山朝晴れやかに秋の声
なまこ壁の並ぶ掘割秋燕
手仕事の指軽やかに秋はじめ
初秋やぼろり本音を洩らす友
水明熊谷句会 (熊谷)
読経にひびく鳴き声法師蟬
朋友のちよいと野暮用秋夕焼
味噌蔵の闇の匂ひよ初風
ノンプレスながき一声法師蟬
初嵐竹百幹の風うなる
文机の窓辺に果つる法師蟬
故郷の隠し砦や法師蟬
遠き日の指切りげんまん法師蟬
りんどう俳句会 (浦和)
生身魂煙管片手に横座かな
禁断の木の実あれこれ生身魂
水明に鬼の字のつく生身魂
嫁迎ふ家の周りは稲の花
裏紙に狂句一句を西鶴忌
新涼の神酒所賑はふ裏通り
うそ寒し裏の裏行く刑事かな
スクープの裏取り確か台風来
今もなほダンディに決め生身魂

光 昇
恵 子
史 代
節 代
正 行
卓 郎
風 子
秀 子
燈 女
栄 子
徹 平
茂 子
翔 太
徹 雄
月 夫
君 夫
風 子
卓 郎
弘 夫
まりこ
順 子

芽吹句会 (浦和)
浴衣着て稽古積む積む手話狂言
秩父路の風のにほひよ秋に入る
頬なでてゆく透きとほる風今朝の秋
太極拳からだの軽き今朝の秋
校長室を覗く背丈よ黄のキャンナ
菜園に溢るる笑顔花キャンナ
キャンナとの背くらべすも老なりや
谷底の湯に身を任す今朝の秋
めだか句会 (浦和)
星月夜共演したね学園祭
母の説くおしやれのいろは秋裕
芝荒れて雨のうらめし残暑かな
三味線の合ひの手ひとつ秋裕
ドーナツの穴から覗く残暑かな
共布の御守渡す踊の夜
秋思かな何故に懐かし全共闘
四段目の小鉤残して秋裕
共通の宿題を手に残暑なか
富 子
玲 子
久美子
千重子
チアキ
ひろこ
道 を
知 子
灯 留
妙 子
六 弦
敦 子
月 子
鶴 城
はるみ
三 茅
☆ ☆
(小田美智改)

令和6年 新珠賞作品募集

水明新人賞である新珠賞作品を下記の要領により募ります。

新人登龍門の主旨をよく解されて多数のご応募をお待ちしています。

- 応募資格** 季音同人を除く同人・誌友
- 応募句** 未発表作品：15句(表題を付す)
水明集・句会報等「水明」誌及び外部に
発表した作品は不可。
- 締切** 令和6年2月末日(発行所必着)
- 応募方法** 水明12月号に応募用紙添付

選考は、新珠賞推選委員による推選結果を参考に、新珠賞選考委員会に於て受賞者を決定いたします。

尚、誌上には受賞者の作品のみを発表します。

新珠賞選考委員会委員 (9名)

山本鬼之介	網野月を	大村節代
石山かつ子	石井喜恵	保坂翔太
青木鶴城	日高道を	曲淵徹雄

第7回「水明塾」のご案内

[日 時] 2023年10月30日（月曜日）

午前の部（水明集作家対象）10:00～12:30（09:30受付）

◆全句講評講座

午後の部（水明全誌友・同人・季音同人対象）14:00～15:50
（13:30受付）

◆講演会

- ・講師：堀田季何氏（現代俳句協会理事／IT部長）
- ・演題：「俳句における季語について（仮題）」

[会 場] 浦和駅東口パルコ10階第13集会室

[会 費] 午前の部1,000円、午後の部2,000円

[申 込] 10月20日（金）までに巻末添付の申込書に会費を添えて
発行所総務部へお申し込みください。

※昼食はありません、昼食、飲み物は各自で持参してください。

※午前の部の「全句講評講座」の受講者は申込と一緒に当季雑
詠2句を投句すること。

※申し込み無しの方の入場は出来ません。なお、状況に拠って
は、内容を変更する場合がございます。

事業部

「現代俳句カレンダー 2024」 販売のご案内

現代俳句カレンダーご注文の受付を開始します。今年も引き続き多くの会員からのご注文をお待ちしています。

◆**体 裁**：A 4判の上下二連(B 4判から A 4判に変更)

◆**価 格**：1,200 円 / 1 冊 (定価の 2 割引)

◆**注 文**：下記の通りお願いします。

葉書に3項目を明記する。

①注文者の住所・氏名・連絡先電話番号

②注文冊数

③受取り方法[発行所で引取・自宅又は指定先に発送]

葉書の宛先は、

〒330-0064 さいたま市浦和区岸町 4-10-21

水明俳句会 カレンダー係

注文締切 10月25日(水) お早めにどうぞ!!

◆**備 考**：①水明俳句会より下記7名の俳句が載ります。

主宰(短冊揮毫) 網野月を 大村節代

石山かつ子 椎野美代子 大橋廸代 星野和葉

②自宅又は指定先に発送をご希望の場合は、
実費送料をご負担いただきます。

※間違い防止のため、ご注文は葉書でお願いします。葉書以外の注文はご遠慮ください。

※ご不明の点については、[総務部 日高道を]

TEL 090-2122-1223 へお問合せください。

主 宰 山本鬼之介
総務部長 日高道を

俳句の日めくり

2024
令和6年

カレンダー



俳句の日めくりカレンダー 2024
サイズ：18.5×12cm・380ページ
「掲載句と俳人の一覧表」付き
監修：神野紗希

巻員の奥に目覚めし春一番

佐藤成之

一日一句、366句を掲載。

明治時代や現代の句も、幅広く掲載。

作句に役立つ「暦」の情報。

季語、旧暦、節句や行事などの情報も掲載。

すべての引用句に解説付き。

すべての引用句に、神野紗希氏の解説付き。

送料無料！一冊からでも。

まとめ買い割引もあり、ますので「検討下さい」。

資料をご希望の方は、下記へご請求ください。



※在庫数に限りがあるため、品切れになる場合がございます。

新日本カレンダー株式会社

〒537-0025
大阪府東成区中道3丁目8番11号

TEL.06-6971-4480
FAX.06-6972-5885

特集 空想季語に遊ぶ「秋冬篇」・結社競詠

特別企画 ナンセンス俳句の愉しみ

巻頭作品10句

伊藤伊那男・大高 翔・河村正浩
中村和弘・深野敦子・黛まどか
三村純也・和田順子

俳壇

11月号

10月14日発売
定価900円(税込)

巻頭エッセイ
尾池和夫

八木健選 滑稽俳壇

四季巡詠33句「第Ⅱ期」：亀井雉子男・笹瀬節子

俳人の住む町……和田華凜・岸原清行
俳句文法 そのが問題、そのがポイント……井上泰至
名句のしくみと条件……坂口昌弘
私の本棚・私の一冊……中山和子
十二月添削教室……前北かおる
俳書の森を歩む……栗林 浩

連載

俳句と随想12か月 井上論天・清水和代

本阿弥書店

〒101-0064
東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 電話03(3294)7068 振替00100-5-164430

句碑清掃

(かな女先生句碑)

水明初代主宰長谷川かな女は、旧浦和市(現さいたま市)名誉市民です。そして、さいたま市の別所沼公園と調神社の二箇所に、句碑があります。

去る九月十一日の常任監事会の前に、句碑を全員で清掃しました。句碑を丁寧拭き、句碑の囲りの落葉や塵を掃き清めました。

すっかりきれいになりましたので、秋日和に、散策しつつ見学にお出かけ下さい。

曼珠沙華あつまり丘をうかせけり

(昭和二十八年十一月建立) 別所沼公園
生涯の影響ある秋の天地かな

(昭和三十六年四月建立) 調神社



←(調神社)
(別所沼公園) ↓



通信添削指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、通信添削指導を実施しています。

希望者は、下記により作品を送って下さい。

主宰 山本鬼之介

〔指導者〕 網野月を

〔作品〕 5 句

〔受講料〕 1,000円

〔方法〕 ①用紙自由

②住所・氏名・電話番号を明記

③84円切手を同封

④返信用封筒は不要

⑤締切なしで随時受付

〔送付先〕 網野月を

電話 080-7580-0208
〒338-0012 さいたま市

中央区大戸1-31-2

風 声

○俳句四季八月号——「季語を詠む」欄

離れ座敷へ金玉糖を運ぶひと

鬼之介

○現代俳句八月号——「現代俳句の風」欄

水温を訊く異邦人梅雨の海

菊池ひろこ

綿菓子先の先をつままれ夏銀河

梅澤輝翠

蓮見舟今咲く命耳を打つ

大塚茂子

野を渡る風はさみどり新茶汲む

越田栄子

彼の家の栄枯盛衰棕櫚の花

本橋稀香

○くちら（中尾公彦主宰）八月号——「受贈俳誌美術館」欄

藍染のTシャツ父の日を飾る

鬼之介

○新月（松田碧霞代表）八月号——「受贈俳誌紹介」欄

夏帯に漆細工の根付かな

鬼之介

○太陽（吉原文音主宰）八月号——「受贈誌御礼」欄

鼻の差の勝馬ゆけり青葉道

鬼之介

○菜の花（伊藤政美主宰）八月号——「諸家近詠」欄

廃屋の門扉に影を柿若葉

鬼之介

○笥（山本一步主宰）八月号——「受贈誌の一句」欄

池の底とろりと温し蝌蚪生るる

越田栄子

（日高道を抄出）

水明発展基金御礼（敬称略）

—令和五年八月三十一日現在—

山本鬼之介	50口	鈴木貴水	10口
綿引まりこ	3口	西浦千枝子	10口
大場順子	10口	井上燈女	5口
		—合計88口—	

誤植訂正 慎しんでお詫び致します。

九月号三三頁下段

全国大会の記 保坂翔太

六賞受賞表彰の記事中、

（新珠賞）霜多光代 小林京子 欠落

九月号六六頁下段

正 剣道場の静かになりぬ桐の花

誤 剣道場静かになりぬ桐の花

九月号八三頁下段

正 夕焼を背に下る山男

誤 夕焼を背にして下る山男

九月号八八頁上段

正 二度見するほどの憐れよ羽拔鳥

誤

九月号八八頁下段

正 雲の峰ゴジラはイヌに呑み込まれ

誤

小林京子

星歩

理恵

千祐

後記

今月号は「夏季競詠」主宰選の発表です。水明集の方が上位になられたり、季音の方があれと思われたり、悲喜交々です。

ところで、編集部では、檜鼻ことは氏がお書き下さっている季音月評九月号十一頁――

「押鮒や一つ覚えの旅土産」の句評「一つ覚えとあるからには、きつと鉄板の美味しさなのだ。」の鉄板が分らなくて、辞書を何冊か調べても出ていません。思いあまつてことは氏に、お電話したところ、丁寧なメールを頂きました。

「鉄板の板を意味する語。鉄が硬いことから転じて、狙い通りの成功がかたい（＝確実な）さまを意味する俗語としても用いられる。相手から良いリアクションを受けることが確実視される話題や冗談を指す。鉄板ネタ、などがあ。……」の意味で使いましたが、

俗語のようですので、「一つ覚え」とあるからには、きつと間違いない美味しさなのだ変更していただいても結構です。お任せします。」

検討した結果、ことは氏の原稿通りに掲載させて頂きました。

その後、NHK俳句九月号の夏井いつき「凡人からの脱出」欄に、……「夏休・宿題」という Teppan の類想を例に……の記述を読みました。片仮名の Teppan ではますますですが、ことは氏に教授頂いていたので、分かりました。編集部では、分からない時、読めない時は、作者にご教授頂いております。どうぞよろしくお願ひします。

コロナが増加に転じて、その上早々とインフルエンザが流行しているようです。全国各地で学級閉鎖とか。有効な対策手立とはなく、結局のところ、マスク、うがいとか。どうぞ、お気をつけて。

(節代)

今月のはてな？

天赦日(てんしゃにち)
魁生(せせい)
饑(ひだる)い
荔枝(れいし)
金玉糖(きんぎょくとう)
裏(つつ)む
竹籤(たけひこ)
穿(ほじく)る
炯炯(けいけい)
曝板(しゃれいた)
雲母虫(きららむし)

頁 12 16 20 30 39 65 74 83

水明発行所受付時間

(048-822-4741)

曜日：(月・火・水・木・金)

時間：12時半～午後4時半

(土・日・祭日は休み)

水明の行事と重なった時は休み

(上記の時間には係がおりますので、

ご用の方は 時間内にお願ひします。)

水明

令和五年十月号

通巻一一七号

令和五年十月一日発行

発行所

水明俳句会

〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四一〇二二

電話 048-822-4741

ホームページ

「水明俳句会」で検索

誌代 半年分 六、〇〇〇円

一年分 一二、〇〇〇円

同人費(誌代を含む)

一年分 二四、〇〇〇円

季音同人費(誌代を含む)

一年分 三〇、〇〇〇円

振替〇〇一七〇一〇一九三九三

発行人 山本鬼之介

印刷所 中央美版

「第七回水明塾」申込書（締切十月二十日（金））

◆「第七回水明塾」 十月三十日(月)

◆会 費 午前の部（全句講評講座） 一〇〇〇円 午後の部（講演会） 二〇〇〇円

◆申込方法 参加費を添えて発行所・総務部あてに申込書とともに申し込んでください。

◆申込書送付先 〒三三六―〇〇六四 さいたま市浦和区岸町四―一〇―二十一 水明俳句会

令和五年 十月 日

住所	〒											
電話	TEL											
氏名												
午前の部	・参加					・不参加						
午後の部	・参加					・不参加						
会費	・一〇〇〇円			・二〇〇〇円			・三〇〇〇円					※いずれかに○を記す
◆午前の部(当季雑詠)												
◆[緊急連絡先電話番号]												
電話番号	() ()					電話所有者						

山紫集

一月号 十月二十五日締切

氏名(俳号)

十月の兼題 「木槿」 (傍題可)

投句対象者 同人及び季音同人「花欄」「月欄」

※最上部の枠から間を開けずに楷書でお書きください。

(注意) この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を

使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って
使用して下さい。

旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所

氏名

年齢

季音抄

山本鬼之介

炎帝に唸りを囁ます掘削機
瀬戸は夕風パールブリッジ灯を点す
金閣の姿涼しき水鏡
異国語の坍塌浅草の秋暑し
端正に処暑の風受け高野槇
新涼の灯をこぼしゆく屋形船
廃屋を沈めて迫る草いきれ
晩酌は五時と決めたる生身魂
吾がしるべ青春の書は紙魚の糧
湯のやうな雨が残暑の街洗ふ
団栗を踏めば脈打つ足の裏
機町に機音消えて法師蟬
秋めくや余白の多き水彩画
流れ星離れ小島の神神へ
雨一つ二つ四つ十桐一葉
深海に男のロマン夏の果
秋めくや飛行機雲の絶巔よ
熱帯夜終着駅の時刻表

茂木和子
森本早苗
矢作水尾
山中みどり
柚木治子
由良ゆら女
井上燈女
高島寛治
梅澤佐江
松井由紀子
大場順子
大塚茂子
野田静香
河野はるみ
青木鶴城
日高道を
笹本啓子
檜鼻ことは

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内
(句に雑誌名、句集名、刊行月を付す)

▼散歩道へ身辺トピック

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内
(題をつけて)

▼山紫水明へ随筆

テーマ：自由

枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

夏季競詠抄

山本鬼之介

渴筆の一句の風姿古団扇
 マロニエの花咲く丘の保育園
 横綱へ白真四角の大団扇
 団扇風富嶽の波の彼方から
 日本の団扇の風に眠る稚
 白団扇草の庵に墓ふたつ
 おほほの口を隠す女の京団扇
 熔接の地を這ふ火花夾竹桃
 団扇持ち黒田清輝の絵を気取り
 八月の夾竹桃は魔女の舌
 白団扇置屋を飾る芸妓の名
 風情ある木目の座卓京団扇
 面影は昔を留め背に団扇
 絵団扇の美女ふと鬼女に見ゆる夜
 勝機いま団扇の拳がる応援歌
 浮世絵の団扇をそつと額の上
 白団扇妻より淡きシャボンの香
 こんな木でも母の愛した夾竹桃

柚木治子
 矢作水尾
 大橋勉代
 由良ゆら女
 梅澤輝翠
 檜鼻ことは
 境延昭
 石井喜恵
 梅澤佐江
 日高道を
 鳥羽和風
 越田栄子
 青木鶴城
 大村節代
 五明昇
 石山かつ子
 正木萬蝶
 網野月を

水明例会案内	句会名	日時	会場	指導者	幹事
	第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	茂境 木和子 延昭
	第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山青 中みどり 木鶴城
	第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明 昇 曲淵 徹雄
	第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	椎野美代子	境延 昭 石井 喜恵
	第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤 佐江 河野 はるみ
	若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木 萬 石田 慶蝶 子
	関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化(セ)	大橋勉代	森本 早苗

水明

令和五年十月一日発行 毎月一日発行

(第九十六巻 第十号)

定価 一〇〇〇円